

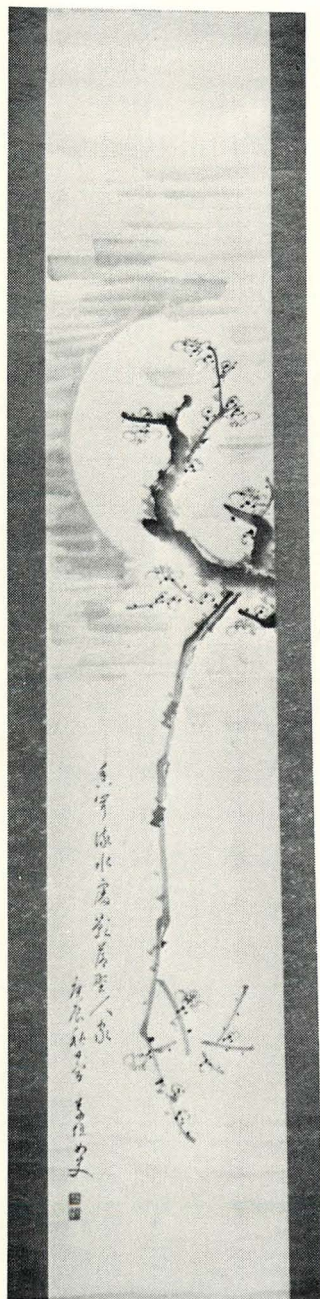
あさ

特集 婦 道

第 25 号



まつき・そうえん女史彩管



中曾根通産大臣と天村先生の会談



〔写真右〕 佐藤栄作氏(左)と握手される天村先生(右)

―昭和四十八年十二月五日、東京・ホテルオークラにて―

〔写真上〕 中曾根通産大臣を訪ねて(本文五七頁参照)

左から小林亀男氏、中曾根通産大臣、木村豊治氏、松木天村先生、通産省政務次官楠 正俊氏

―昭和四十九年一月三十日、東京・砂防会館大臣事務所にて―



目次
卷頭言——無限供給の場を新しく発見把握せよ
“あさ” 第七卷第二十五号

天の理

——本当の理——

《特集》——婦道——

天村先生を囲む定例茶話会

亡びざる日本

東 国徳 22

この道あるから国が助かる

松木天村 23

新しい世にかざす

閑院純仁 37

魂の練成

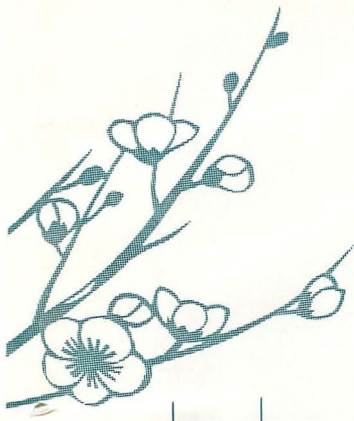
佐藤三蔵 38

定例茶話会の記

桑嶋正忠 80

人間の根を知る

市野光鵬 40





グラビア——各地の催し——

総調和の集いにて

4

本田技研鈴鹿工場七代会新年例会に招かれて

松本天村 54

中曽根通産大臣と天村先生の会談

小林亀男 57

座談会

下座 (その二)

浮世に灯ともす

75

羽曳野市新市庁舎落成祝賀式に招かれて有感

松木天村 77

昭和四十八年 天村先生講演会等一覧表

81

編集後記

84

表紙「松」二十号F若林昌峰画(松籟閣蔵)
書・原 高千代、カット・小野義明、写真・太田修三

48 | 12 | 14 | 淀川 R C | 阪神百貨店グリーンルームにて



て 49 | 1 | 6 | 近畿地区推進委員会大阪都ホテルにて



天村先生を囲んで北海道
旭川道友の夕食会
48 | 12 | 10 |
ホテルオークラにて



岸和田 J C 49 | 2 | 12 | 岸和田商工会議所



新しい道講演と映画の会 松戸
市常盤市民センターにて
48 | 12 | 16



巻頭言

無限供給の場を新しく発見把握せよ!!

|| 結果の世界で乱舞する現代人よ! ||

新しい道提唱者

砂子五打

人間の敵は正しく人間だ

インフレ相場―かてて加えて石油危機といわれる異常日本に対処する政府は、生産の抑圧、消費の抑制(節約・貯蓄)と大童である。

消費は美德だと高度経済成長を謳歌した昨日と今日はまるでコペルニクスの轉換を余儀なくされた。しかしこの程度の政策轉換で果して異常日本が平常に還るだろうか!。

生産と消費を抑制するといっても法律ではどおにもならない。例えどんなことが、いつ、どこで起つても、人間の敵は正しく人間だ!人間自身のものの考え方が変らない限り、どうしようもない。

然らばどう変ればよいか!

ものには原因と結果がある。異常日本という今日の現象は成つて来た結果の世界である。故に成つて来る原因の世界が矯正されない限り好ましい結果は得られない。良くなるも悪くなるもその原因をつくるのは人間なので

ある。この意味で、人類は今結果の世界で乱舞している。

ありがたい、もつたいない

生産、消費を抑制する、又、節約ケチケチ運動ぐらいでは根本的対策とはならない。これら以前が問題である。それはわれわれ人間ひとりびとりが「もつたいない」という気になることである。例え一粒のお米でも、一枚の紙でも人間だけで作れるものではない。人が大自然に働きかけて開発し、利用させていただくものである。故に「ありがたい」「もつたいない」と感謝の気持ちですべてのものを拜んでいただくように、人間が変わったときこそ始めて公害、汚染がなくなり、又交通戦争などというようなものもなくなり、われわれの経済的生活は自然に即して安定され一切の不安がなくなるのである。

価値の転換

今一つは、価値観念の轉換である。

政治家も、経済人も、更には学者も評論家もその総知を傾けて、今日の高度経済成長を成し遂げた。けれども石油問題によつてもろくも崩壊した。これは床の生花のようなもので、根がないので枯れてしまったのである。根とは人間にとつて魂の問題である。草や木の根は地下深く蔵されているので見えない。これと同じで人間の根（魂）は手にとることも見ることが地上最高の次元の場である。この根（魂）のいとなみによつて人間は生かされて生きているのである。

この根（魂）は肉体の健康、優れた知識、或は地位、名譽、財産等に優さる最も価値高きものである。この価値高き存在（魂）を意識しないで、頭（心）が主体だと考える現代人よ、頭の切り換えをして、最も価値高き存在（魂）を新しく発見把握して、その無限供給の場を振起発動せしめ、価値を価値たらしめなければならぬ。即ち知性にもとづく物質文明から魂を主体とする靈性文明に移行できたら人類最後の聖なる憧憬を満す新時代が展かれるだろう。

私は数年前から今日の来るべきことを予告し「資本と技術の時代を経て、今心より魂（原点）に回帰する文明の歴史的轉機に立たされている。」と口々に筆に警告し訴えつづけてきたのである。

昭和四十九年二月二十六日

天皇ご大婚式に謹んで松籟閣にて記

本當の理

こゝに抄録した天のご垂示は、昭和四十八年十月十日紫の間におけるものであります。現代的風潮に流されて、人間が本来あるべきその姿を失いつつある。今一度、本當の理によって、人間として、日本人として、男として、女としての正しい在り方をしたいものである。

さあ それでは 只今から ご一統さんに
喜んでく 喜び了す こういう気持
その気持を どうやく 一人残らず 今の内になんとかして
どっこい さあく こういう塩梅に
我自らに よくく 言ひ聞かして

こういう時代を のりきるところ

この意味を どっこいしよ

お前さん達 何かの形で さあ／＼

自分で自分に どうや／＼ よく／＼言い聞かして この道／＼ 喜びの理 これどうです

喜べるお方 喜べんお方 そこに差がある

この道でどうです 自分というものを あらまあ大したもんだ 大したものにしているなあ そう

いうお方もいまずんえ

ほら／＼ これ どうです

自分というものが 何時の間にやら あらまあ 何となく口嬉しそうに いただけるような その

恰好それを知りましようえ

いろんなお方 いろんな角度で

この道によって 自分変っている そういうお方が どうです／＼ もっと／＼ 喜びましような

喜ばないな 喜んではないな それでは あらまあ 間が合わん こう申しますんえ

間が合わない こう云っている

間が合わんわな 間が合いませんわな これ／＼これを云っている

間が合う 間が合わんは こりや／＼ お前さんから次第 これだけです おい／＼ おい／＼

うお—— こういうことを 申しました

ご一統さんよ こういう道 どうです 精一杯 自分を掘って 成って／＼ 成り了す そういう

ところ

そしたら 喜べて／＼ 本当に 喜び了す そうなる筈です

これだけを みんなさんよ 自分と自分に よくよく 聞いてごらんさいや
こういう道があるから

自分というものを 一層に 建替えるだろう
そうしたら あらまあ 大したもんです

こういう時代に 生れてきた自分達 多少は 年の差がある だけど 今の若いお方 これは こ
れとして いずれく

今の若いお方は どうしようもないで

この道によつて 思い方を 百度変える そうなる筈です

それをな 道のお方が 教えるんえ それでこそ若者が喜べる そういう時代です

この道のものが 本当を教える これがくこらやい お前さん達 あらまあ だき具合分るだろ
う

浮世の若者 しにくいだろう 道のお方は それをく 如何です さあく さあく さ

ー放らないで 抱くつもり それが 肝心です

日本人は すべてがすべて ほらやい 一切が 舶来式になった これで大したことです どうに
もならんで

みんなさんが 古いく この道の理を 何とまあ 浮世の若い者に どういうふうに 云い聞か
すだろう こらやい

日本という国 よそにはない 根の国である これを主張するんえ 根だから これからが 素晴
しいんだ そろそろ教えようえ

よその国は 根がない さあ分るだろう 切り花同然 この国だけが 根の国です これを教えましょう これを云わないと 納得できませんのえ

こういう道によつて 本当の理 こらやい 世間には 理はありません この道だけが 本当の理よし／＼ もういいだろう うわー もう これだけです

みんなさんよ こういう道を 中途半端で曖昧では 何にもなりませんのえ 底の底を究明するそれが今です

さあ／＼／＼ あたらしい道 あら／＼

男と女と こう云っている

男（おとこー）よ これが理です

女（おんなー）め こう云います

さあ分るだろう ほら／＼／＼

こういう道で 本当の理を 徹するんですよ

何だ／＼ 今の日本 女（おんなー）めは こらやい 徳というものを あらまあ どうやあ 捨

ててしまっている こう云いました

日本の女 何とまあ つらいなあ これだけ云っておく

日本の女は 女めーで あらまあ どうやあ 自分べしやんで こら／＼ こういうふうにとつ

こいしよ 押しに押し 押しつけられて さあ／＼ こらやい こういうふうになんか 何だ／＼

女は べちゃんこ 女は 愚じゃ 女 引込め これが 日本でした

みんなさんよ こらやい はっ うわー 女ほど しにくいものはない

それを云っているのは この道で

今の世を見て あらまあ 呆れ返っている

そうだ／＼ お前さん達 日本の女は どうにもならんわな どっちがどっちやら わけが分らない
いそがなつてしまっている やりかえです おい／＼ おい／＼ うわ——

この道のお方 どうです 本当の理は

日本は どうしようもない しにくい／＼ 今わの瀬戸 どうやあ ついまあ これだけ 云って
おいた

日本人は 男がおん出て 女はべちゃんこ それが理でした よう知ってや

みんなさんよ 日本の建替え 女の精神 これを云っておく 女の精神が ぐちゃ／＼じゃ これ
だけです

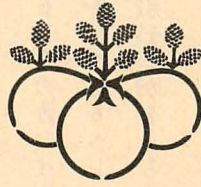
みんなさんよ よし／＼ この道の理が 本当で浮世は 間違いや これを教える

今のうちに みんなさんが 手を取り合つて どうや／＼ この道だけが 本当を云っている

日本は この塩梅では 女の理が あかんで つぶれちゃうで これだけ 云っておく

どうやあ 女が偉らすぎる 駄目じゃ これだけ云っておく みんなさんよ よう覚えてや 建替
えです

さ それでは あたらしい道は どうにもならんわな 見るにつけ 聞くにつけ くだらんなあ
そういう塩梅で とう／＼ この口を通して あら／＼女めー やり替えや これだけ 云いました



婦道

この語録は、天人、松本草垣女史によつて、昭和三十一年に書かれたものであります。

これは、天人のどん・奥からの音であります。そしてその内からの声ことばとうりに歩まれたのが、天人・松本草垣女史であります。

現代の世相を観るにつけ、聴くについで、「世も末なり」と歎かれ、日本の美徳であつた仁義道德が地に墮ちたことに涙ぐまれている女史の昨今であります。

日本の芯（根）は義であります。義の国日本を興さなければなりません。そのためには先ず「婦道」を興す必要があるかと思ひます。女の心を正さなければなりません。

天が夫であり 地が女房である。神ながらの道は、天地の理から始まる。

人道

人は人らしい日々を送るべし

しからば男は男の自分を急ぐべし そのうえ女を
いたわるべし

女は字にもいませしがきつちり といてある如し

男の尻につくらしい

女は男の力にすがるのが本領である 天は力で地
は産むと悟るべし

男女が力をそろえてこそ 人のいとなみもあはず
男女がたすけ合うてこそ 人の命が続くはず

人の行いがとげられず 人の仲間に入るのは人間

おこがましい今である

◇

産むとは産まされる人間の悩みであるはず

産まずして人間の役はたたんはず

但し男は育てる力あり 女は産まされる徳がある

産まん女に徳があるとは 只一つ魂の置き物が問

題であるらしい

魂の男は矢張り子は産めんもの

◇

妻

妻とは男をつまむために、神があたえた名のいろ
である。

これをさいという。

さいとはものあやをつけるはず。

さいとはよくおさえるはず、さいとはよろしく。

さいはさいのよにおとなくあれ。

さいに口をあたえてある、それは子を育てる時に

必要である。

さいは子にはきつい時もある、なんとなれば産み

おとした力みがあるだけ。

女の徳

女には、なにもものをも、ゆるす徳がある。

女を、たてにわると、きつと竹のよおにふしがある。

一つは嫁にゆく、一つは子を産む、一つは老母になる。

これが女の一番つらい役である。

女は家にいらぬ不徳なり。

女は子を宿される宿命なり。

女はおばばになると、捨てられるものなり。

これを女に産れたらいやとおもう。

女はこれにふしを、拜む修養をする。

女ほど、いかにも不幸らしく、みえるものはない。

これを天からながめてふしと言う。

女はふしを三つこしたら、ほめてやる。

女にみさをを教える。

みさをとは一つある。

みさをは、男にあらむ。

みさをを、ふみやぶるのが今の世なり。

みさをに、かれをいれたらふしは真直には割れない。

みさをは、竹のくねっておらん、垂直なのをなぞ

らえて言うておる。

女が今、たいへん男をまわしておるのは、要はい

つも素顔を見せておらんからわからん。

女は素顔が美しいのが、ほんとうであり、ばかしてみるのはうそである。

ばかしたら、きつとその裏がある。

ばかして男を、てにする女を、神から教えをうけて清めたら、日本は美しい国になる。

日本に女の生血をみないが、男の生血をさらしたかどが山ほどある。

女ほど、いやらしい毒はない。

神は女にほほを、そめることをさしてある。

それは、おのつと赤らむことをよろこぶ。

今の女は男をしつておる。

ほんとうは、女は男をしらんものをよしとす。

女の徳を教えたら、今更女を拜む世の男がある。

女は頭の方から足の先まで、つらいものなり。

女は足が地につかぬくらい働くものなり。

女は家から出歩かんものなり。

女はつまと呼ばれる。それをささる。

妻とは、どおうけどる。

ほんものは、家のぬしにあるにより、女はそえもの。

女ほど男につかわれるものはない。

女に教えがあるにより、妻はよろこぶらしい。

妻は花は咲かないが、あやしいのちがすぼむ。

かくれる徳を、妻はもつなり。

妻に徳があふれたら、日の本は今でもふくらむ。

妻は、あけたとびらを今一つあけてみる。

◇

婦

婦とはあたらしい道のはじめのいましめなり。

婦をいましめるのが、道のふしんのちか道なり。

道はふしんを、しながらあおのきしのたてまえがある。

る。

道をとおらずして、たてまえがでけよおぞ。

道からはしつたら、いかにも人間は気がいそぐ。

女にいましめた教えがでだしたら、男もらくに道

がつけよお。

女に男がつくにあらず、男に女が道具なり。



心せよ世は今からが山である

天地も裂ける時が来るぞよ

さわされど鬼子母神でも神なれば

心のおきてはとれんわいな

鬼子母神これも一つのおしへぞな

母が子のため苦しんだ人の手本ぞな

そのわけは遠いむかしにかへるぞな

あまたの子供は母をこわがったほど

日本の女はきついんじや それでよし

いよ／＼になつたら日本の女ほど

きつうなるものはなかつたぞ

それを忘れてならんぞよ

婦人をいかにも、あたらしいもの、よおに言うの

は不思議である。

むかしから婦人は教えをふみおこない、日本の光
は婦人にもどいをなしている。

嫁人がすんだら、男はおよげる。

婦人がおぶさるから、男がこまる。

婦人は男のはらに、おさまるものなり。

男が女をもとめても、みからきた徳をうけたら、

それでよい。

知恵はあさましい。

国が危い時に慾をはなれて

わが身を捨てきる男はあるが

女は少ない 女もたまには

慾をはなれて身ぐるみに

神に捧げる心意気になつてみや

◇
日本には古くから、日本の婦道があつて、

この婦道が、やかましく叫ばれた時代もあつた筈です。しかるに、今は婦道はありませんと、ゆふてもよい位で只かすかなる女の道—この女の道さへもなくなつてきて居ります。

◇
女は悦ぶということが、無上の光であつた筈です。

女は浅間しいものだど、昔から男共にいい伝えられてゐるような節が、度々ありますが、実際に女ほど浅間しいものはないようです。

神様は悦ぶように、人間をお創り遊ばしていられます。

悦びは悦びを増すと教へていられます。

してみると、悦ぶことは何であるか、人間生きるということすでに悦びである筈でございます。

この生きるには、あやしいほど天に借があつて、果さなくては、生きる悦びを感じさしては下さいません。

◇
女はつとめて苦勞する、それがどうやら本當らし

い。それをいやがる、それが嘘らしい。

女には人を抱くだけの、太い力がある筈です。それをだれも知らないで、迷う人があまたあります。

男にすがつて生かしてもらう、それはどうやら口だけである。後は女の徳であるらしい。

◇
女が今の世の中の様に、男をあてにしないで、

ただ持つ道具によつて、男を迷わしている様な態では、到底男の心が清まらないのは、あたりまへであります。

迷わす女の心がいけません。

それをどうしてなくせるのか、

日本の国には今一番臭いのは、この女という女で

あります。

女は虚栄であります。その虚栄が遂に大きい原因

となつて、日本にひびをいれています。

日本は立派なお国であつた筈です。けれど、みに

くい国となりつつあります。なんとなく、悲しい呼

声の日々ふえて参ります。まさしく虚栄であると、

その元を深く掘り下げて見ましよう。

◇

この女がみな日本の昔を、一度振りかえつて思い
起してごらんなきい。

女は時代の風俗によつて、自分を美しくしたとい
う事ぐらゐは、許されていませう。けれどもそれ
も世紀の終りと思えるほど、美の奥をさらけ出して

遊びまわる、女の多いのにあきれます。女は隠すも
のである筈です。それは美しい膚であります。

夫人は男の道具であつたが、今はそうでなく、男
を下にする様なあいまいなかたちとなつています。

ですから、天と地とがでれこ、これでは日本の地
上神国は出来そうもありません。

◇

女は弱いものなり、されど母となると強いものな
り。

女は嫁したら家の名を尊ぶものなり

女は人を踏み越えてはいけないものなり

女は計をとるにうといものなり

女は男を柵にはめさす手段なり

女は悦ぶことが天職なり

女はあまいものなり

女は足に力が入らんものなり

女は首から上が苦しいものなり

女は男の命の糧なり

女は己を出す事は出来ぬものなり

女には何事も、自分を殺すという心がなくてはなりません。ですが、今は女が先づさきに己れを少し出し過ぎています。これが一度に落着くところに落ちていたら、きつと日本の国は、男の領分があふれて来るでしょう。

町々からやかましく、の、しりあう閑の聲が今に聞えて、生かすことにいかに不足かという、真実の叫びが出たら、一番最初にこわがるのは、腰弱い女どもであつて、男をたよりにする筈です。

◇

女に拝み信仰がなくなつたら、男は天上の徳をいっばい頂いて悦んで御奉公が出来るのに、浅間しい

女の世界は、楽をしてよいふうをして居たい。金々漫々まことに地上に魔の巢を見るような世の中になつて来ました。

心のかま。え。を。た。て。か。え。な。く。て。は。天。地。逆。と。な。り。つ。つ。あ。り。ま。す。

心のかま。え。とは、先づ門があつたら、その門に、結構はまる扉がある如く、何事も人間としての心構えを望むと神様は仰せであります。

女は弱いものですが、女は又こまかいものであります。実に親切な点は、男よりも行届いているらしいです。

女ほど本当は、辛抱強いものではありません。女に辛抱と欲とこまかさ、男よりありますが故に………根はこの教えを草垣にお命じになられたのとて御座います。

一月九日午後二時～四時
ロイヤルホテル新館4階3号会議室にて

「松木天村先生を囲む定例茶話会」

大阪

一、挨拶	東 国徳氏
二、講話	松木天村先生
三、挨拶	佐藤三蔵氏
四、挨拶	閑院純仁氏



わびざる日本

東 国 徳

弱輩者ですが、ご挨拶させて頂きます。

私事にわたりまして、誠に申し訳ないんですが、終戦直後、私、感じましたのは、占領軍がいかに二、三十年おろうとも日本民族の歴史は消しゴムで消すような訳には、絶対いかなない。日本民族の伝統というものは、未来永劫に伝わるものだと信じ、現在まできたのでございます。その間、占領政策と言いますが、大きな日本民族の団結力とか、あるいは家族制度を一掃して、支離滅裂な日本を作ろうという政策とうけたまわっておった次第ですが教育の面、色んな面で私個人、暗中模索いたしておった次第でございます。私の右に座っておられるお世話役の佐野安社長さんの御紹介によりまして、天村先生と御呢懇に願った次第でございます。

ますが、暗夜に光明を見出した感じが致しまして、爾来、何かとお世話になっておる次第でございます。是非、佐野安さんに御挨拶をと申し上げたのですが、君が年配だからやれというようなお話で、甚だ本日は皆様方時節柄、お忙しい中、懇談会にお出まし願ひまして、ありがとうございます。これから天村先生の造詣深いお話、又、お互いに暗中模索の中の一つの光明であれかしかと願ひまして、懇談に入らせて頂きたいと存じます。よろしくお願いいたします。

どうもありがとうございました。

この道あるから国がたすかる

松木 天村

みなさん大変お忙しい所をお出し下さいましてありがとうございます。こういう催しができましたことは、誠に私としてありがたいことでありますが、先刻桑島さんが言われたように一般講演会と云うものは、ここ四、五年のうちに随分やって参りましたが、一般講演会になりますと、限度がありまして、実際の深い問題は話しにくいんですが、大阪に於ける実業界の指導的立場にあるお方のお集まりです、是非お聞き願いたいと思います。

「新しい道」というものを提唱いたしました15年になります。さつき東さんの仰言いましたように、絶対に減びざる日本というものがあるんでございます。例えば戦争に負けました日本は、ある意味に於て減びました。しかしそれは日本そのものが減びたのではなくて、所謂軍閥日本が減びたと思います。同時に戦争と共に貴族の日本というのも減びました。そこで今日のような異常時日本におきましては、次に何が起るかという事を考えてみますと、私は、財閥と云うものは、戦争に負けて一度は解体したけれども、又新しい財閥が日本には抬頭して驚異的な躍進をとげて参りました。こう考えますと次に減

びるものは何かと申しますと、先ず今の資本主義による財閥と言いますが、そういう日本というものも減びると思ひますし、同時に政治家の指導する日本というものも減びると思ひます。そういう考えを持つておりますが、何故そういう時代が来たかと云うことを申し上げたく思ひます。

新しい道は、減びざる日本の伝統的な持味というものを、現代に新しく甦らせていくということです。この道は日本民族である限りは、通つて行くべき不変的な道を提唱しているのであります。別に格別変つた宗教とか、修養とか、学問でもありません。只、日本民族としての行くべき道を提唱している訳ですから、普遍的な存在だと思ひます。こういう道を何故私が提唱しているか、その根源を申し上げたいと思ひます。それは、私は甚だ言いくいんですが、私の妻であり、現在は天人あるいはおやかた様と道友の方は尊称しております、その「天人」なるものから根本が出ておるのであります。

所が、自分の事を自分で申し上げるんですから、一般公開の席では、私あんまり語りません。しかし今日のような状態になりますと、その根本的な問題と云うものを御了解願わなければこの道の今後の推進というものができないと思ひます。その意味に於いて今日はあまり一般的に話をしない「天人」について話すつもりで参りました。これは古今東西の歴史にない人間の在り方でございます。一言で申しますと「天人」と云う事は、今を去る約三千年前釈迦が末法世界―末法の世界が来るんだと申しました。

その時には弥勒が下生して人類を導くんだと言つております。その末法世界というものが今なんです。20世紀になつてそして末法世界がくると云う。末法ということとは、つまり仏法が役に立たない時代が来るんだと云うことです。その時代に於いて所謂弥勒が下生して人類に新しい光明をもたらすんだということですが、そういう予言を釈迦はしておりますが、その予言どおりの末法の世に弥勒が下生したというそのものを、「天人」と言つていいと思ひます。それについて成程と御納得できるような順序を立ててお話をしたいと思ひます。

予言者と救世者

今迄の世界の歴史を繙いてみますと、色んな予言者がたくさん出ております。釈迦もその一人でしようしその他靈能的な予知能力を持った素晴らしい人物もごございます。中でもこの頃非常に宣伝されている「ノストラダムスの大予言」この紹介文に「ノストラダムスは……万人必読の書である。」とあります。又、「一九九九年七月、人類は完全に滅亡する……と、この本は予言している。あなたならどうする？」とあります。この種の予言はいくつもあります、この本の予言は四百年前に20世紀の人類がどうなるかと予言しているのです。それが今迄99%適中していると云うことです。一九九九年七月に人類が滅亡すると云うことは一〇〇%確実だと書いてあります。

時代が人類的な規模で危機を孕んで参りましたが故に、この本を現代的に理解し発表した訳です。これはあえてこの本でなくても、昨年ローマクラブも、「このままでいたれば30年もすると人類は滅びる。人口の増加、食糧不足、公害と云うような色んな大問題が起こり……」と言っております。このように現在の学者が理解できるような予言を残しておる訳です。その本の予言の中に「人類は莫大な消費に向かう。そして巨大なモーターが時代を一変する。雨・血・ミルク・飢饉・兵器・疫病、空には長い炎を吹き出すものが飛びまわるようになる」とあります。それを現代の人々は、これを基礎にいたしました。色んなデータを作り、人類は30年したら滅びるんだという風な説明を加えております。又「一九九九年の七月頃、空から恐怖の大王が降ってくるだろう。アングルモアの大王を復活させるために、その前後の期間、マルスは幸福の名のもとに支配するだろう。」恐怖の大王と言っております。又、「魂のない肉体は、もう犠牲にされることはない。死の日は本来の自然の中に溶けこみ、み心は幸福な魂をつくるだろう。み言葉を永遠のものとして仰ぎみながら」これにキリスト教の所謂「はじめに言葉ありき」という

ものを引用して説明しております。そして結論として一九九九年の七の月人類は終りを告げるんだと言っております。

こういう予言は、この著者のみならず、世界に十数人いたように言っております。しかし、こういう予言者という者はそういう恐ろしい日の来ることを予言しますけれど、しからばどうしてそれを救つてゆくかということとは言っておりません。所がさつき申しました釈迦はそう云う時代が来るが故にそれを末法と言ひ、その時に弥勒が下生して人類を新しい世紀に導くと言つています。この仏法が長い人間類を指導して来ながら、現在、何故役に立たなくなるかということでありまして。それは「法」というものは全て現象の、結果の世界であります。その奥の奥に原因の世界というものがあります。それを「理」と申します。「法」と云うものは、仏法に限らず人間の心、知性に対しての教えであります。仏教の他、たくさん宗教がありますが、全て人間の心を導く、悪いことをしてはいけない。いい事をせよと言つて導いてきたことが「法」であります。で、末法になると云うことはそういう程度の教えであつては、人間の知性と云うものが非常に高度に進んでくるが故にそれでは間に合わない、もう少し高い次元の教えがなければ人類を真に導き得ない、これが末法だと思ひます。

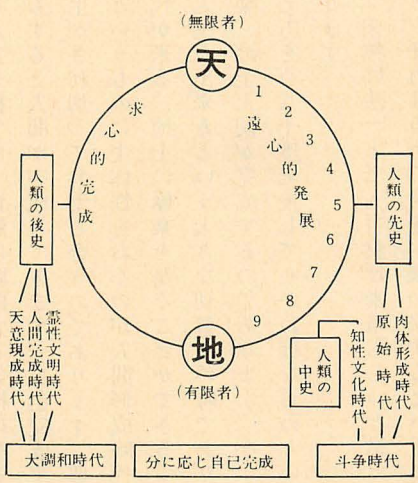
そういう大きな転換期が来たということです。

遠心的発展から求心的完成へ

(次頁の図で)皆さんご了解願ひたいと思ひます。上に無限者がございます。神、仏に名前があるのではございせん。信仰の対象として名前をつけてあるのであつて神や仏に名前があるのではございせん。無限者、究極的な存在、その究極的存在を天と仮に云ひます。神とは云ひません。神、仏よりも

つと高い次元のものを指します。ここは全く空でございますねえ。ここに人間の種が宿された。それは無限的な十数億年前とされています。人間の生まれてまいります時、一つの細胞が懐胎されていく順序を大体考えて頂ければよい。集約しますと、母胎の中において単細胞から始めて肉体人間を形成してゆく十月十日の創造の大業です。少なくとも十数億年かかったであろう。死にかわり、生れかわりして聖書にありますアダムとイブが出来るのに十数億年の日数がかかったと思えます。それは肉体形成するために遠心的に発展してまいります。そうして人間は完成を遂げました。これを肉体形成時代と云います。肉体はできましても知性というものは蒙昧な原始時代であります。次には知性を人間に仕込まねばなりません。知性という仕込みが知性文明時代です。

物には総て絶対の法則があります。遠心的に進歩発展してくればその極限にいったら求心的に百八十度の大転換をせねばならない時代に來ております。これを釈迦は末法といい、大子言者ノストラダムスが



先程の様に言っております。

このまんま人類が今迄のような考えで進歩発展を遂げたらどうなるか、軌道はずれねばなりません。奈落の下に落ちねばなりませんねえ。これが二十世紀の末期なんです。

今迄の考えではどうにもならないという時代が今なんです。この姿は神から、天から最も遠ざかってしまっている。「新しい道」では「自然は親なり」と云っています。自然とは天の意志です。自然に順応する生活をすれば平和な生活ができるのです。今日ほど自然に反逆した時代はございません。総て人間本位であります。だから、やっぱり自然というものに還らねばなりません。自然を敬愛するという考えに還らねばなりません。我々人間が真に生きるためにはやっぱり天を拝するという、天に感謝するという思いにならなければ、今作ることが有難いという思いに変らなければどうにもなりません。人間の知性によってどうにでもなるんだという考え方を捨てて、自然に順応する気持になる——ここから靈性文明が始まります。やがて、二、三十年もすると人間が完成してきます。自己完成するんです。一切のものが、その各々の分を生かし、生かされ切って共受し合うのであります。豊富な物質の中に居ても、物に振り廻されるのではなくて、魂というものに主体性をおくのが人間形成時代——そして五十年も経ち、百年も経った時には天意現成時代が来る。地上に極楽を築くことができます。長い／＼人類の歴史においてこれから百年もすれば地上に天国が出来るという大きな切替えの時であります。ここでもって地上の平和、宗教上の大理想である極楽、地上天国が完成するのであります。そういう大きな時代的転期に直面しているから人間の思い方考え方を百八十度転換してゆかねばならぬという時代が来ました。今迄の知性では駄目だということであります。

この意味に於いて、日蓮と言う人の「南無妙法」と云う言葉は素晴らしいと思います。南無とは、仏さんに帰依するということもありますが、それよりも自分を「無」にすることです。

日本民族は昔は自然に順応するという生活をして来ました。日本民族はいわゆる知っても知らなくても無意識的に魂に主体性を置いていました。魂のささやき、魂の声に従って人々は行動したんであります。これが日本民族の最も古い伝統的な素晴らしい持味でございます。

自然によって仕込まれた日本人の魂

さてこの魂と云うものが、言葉でも申しますし、字も書いてございますが、靈魂、魂というものを本当に認めていらっしやる方と認めない方とがいらっしやいますが、我々は魂があるから生まれて来たのであり魂があるから生かされて生きているんであります。

これは絶対の存在です。この自己の絶対なる魂というものを、承認しないということは、上皮の自分達丈けしか知らない。絶対というものを把握しないとということですね。主体性がないということです。大体に色んなものに迷ってしまっているということですよ。

自己の主体性である魂というものを、本当に把握出来たならば、その人々の自主性が確立して参ります。

だから日本人としての本当の魂を喪失しておりますが故に、今日の日本の外交なども、日本人としての自主性を欠いております。外界の事情によって、色々狂って来、迷わされます。しかし目に見える手にとることの出来ない科学的に説明出来ない、論理的にも説明出来ない、これこそ自分の最高次元の存在であること。これが本当の自分です。本当の本当の自分なのであります。だから我々日本民族はそれを俗に「肚」と申します。肚を作ろうではないかと申します。だから日本民族はそういう魂。直截的に自然から仕込まれて参りました民族の独自性をもって参りますね。その魂をです、かつては「大和

魂」と名付けました。

所が今頃そういうことを申しますと、何だといって、若い人から抵抗を感じますね。皆さんもそういう大和魂ということは、御承知でございますけれども、一体魂は、どういう能らきをしてるか。何処にあるかということは、余り意に介しませんね。肉体は死ねば無くなります。心も雲散夢消しますが、魂だけは残ります。この魂を我々は受け継いで来た。これが日本の素晴らしい伝統であり、これを大和魂とつけた訳です。

所で物にはすべて中心がなければ、まとまりません。人間が今日生存していると云う事は、中心的存在である魂があるからです。独楽にしても中心がなければ狂ってきます。家庭でも会社でも中心がなければまとまりません。国もそのとおりです。日本の中心は天皇です。天皇と云うものに国民がまとまってゆくと云う事は、何も統制とか統一とかいう意味でなく、日本民族の自然の理です。天皇というものは陛下の肉体にあるんでございません。

天皇というみ位は、陛下のみたまにあるんでございます。そういう存在を無視してしまつては日本民族というものは崩壊する以外にございません。それは近い歴史において実例がございますね。説明ができます。戦争に負けたんだと。負けたということは軍閥日本が減びたんであつて、真の日本は減びなかつた、減びざる日本があつたんだということは天皇です。天皇がご安泰であつたという一事でございませぬ。

それは目に見えないけれども天皇のみたまというものは全く無心でございます。自己がなかつたんでございます。これは説明するまでもなく、陛下がマツカーサー元帥にご自分の意志においての会見によつてご承知でございます。他の民族の元首とか王様などはまず亡命するか、命乞いに参りましようね。そうでなかつた。我々、私及び皇室はどうなつてもいいからどうか日本国民を救つて戴きたいと

いうことをマツカーサーに伝えたくてございます。そのことによつて日本は救われたと云えますんですね。それから、このみたまの能らきというものは無限の力をもつていと申しますが、人間の知性というものは限界がございます。明日あさつて将来どうなるかということとは絶対に解りません。

だからその天皇のご立派な魂がそういう風に思わされたということですね。それで決断が出来た。そういう風に自分の魂の能らきというものが高度になりますと素晴らしいことになります。ですから知性というものはまあ今のこの程度でいいんだと、だから我々は大和魂なるものを振起発動しなきゃならんということでございます。そういう時代が、大きな転換期が来たくてございます。

だから石油問題に致しまして一つのそういうことの禍を転じて福となすということでございます。

話は違いますが、私、昨年以來自民党というものが無力になつたと、自民党が危機だということをお呼びしておりました。しかし、私達にとつて、自民党が何も危機になつたつて構わないでしょう。然し、今の社会情勢から見ると自民党の危機を迎えるということは日本の危機につながりますね。放っておけないと思ひまして、昨年から自民党の要人、政治家いわゆる実力者にずっと会つて参りました。

一昨年の秋、小山さんにお会い致しました。

それを手始めと致しまして、昨年の七月には福田さんに、プリンスホテルで会いました。私は率直に云つたんですね。自民党の危機を訴えているんだが、貴方の方の自民党がどうなつても我々はいい、けれども自民党の危機は日本の危機につながるんですよ、一体こんなことでいいですかと、いうことを率直に申しました。

それともう一つは、自民党の体質改善の問題を話しました。

亦、肚の政治と申しますね。これを祭政一致とかつては申しました。祭政一致ということは、唯、神様に祝詞をあげて儀式をして政治をするという形式だけのもんじゃございません。祭政一致ということ

は、天に祈る、天の声を聞く、そして天意に添うた政治をする。こういうことなんです。

そういうように本当に虚心担懐ですね、天に頭を下げて、人間以上の力を与え給えという、そういう政治が必要でございます。知性は限界がございます。しれたもんでございます。知性で行う政治ではもう駄目なんでありませぬ。祭政一致でございますね。これを肚の政治と申しませぬ。

今言いました祭政一致は、神様を拝む必要はございませぬ。臍さいというところは臍さいということ、日頃々々の問題になりますね、今度は、魂ということ。臍さいとはお祭りの祭ではなく肉月の臍さいということですね。臍さいでございます。臍さいの政治でございます。この話を、私、昨年九月頃、三木さんに会いまして二時間位のお話の中で致しましたんですが、話のついでに臍政一致という御話を致しました。三木さんは「成程ねえ」とびつくりしておられました。

天人出現と弥勒の世

そこで、いよいよ時間が経ちましたが、簡単に一言申し上げたいんですが、天人のことでございます。天人は、今から三十年前に、まあ普通に云えば天啓が降下したと云えませうね。天啓という以外に云い方がありませんから、そう申しますが、世間で云うところの、靈能者でも天啓者でも何でもありません。普通の人間でございます。今日もそうでございます。平凡な人間でございます。然し、普通の人間であるけれども、実に優れた叡智えいちを持っております。彼女のみたまというものが高度に飛躍したんでございます。何故、高度に飛躍したかということは、彼女は、生れて以来今日に到るまで、盤根錯節の生活をした、茨苦勞の苦勞をしたということ、一切自分を無にして非常に苦勞をしたことであります。この一言に尽きます。

そうして、伝教大師の語録にありますように、「一隅を照らすものはこれ即ち国宝なり」そういうその言葉があてはまるんです。天下国家を論じて奔走したのではなく、家庭の婦人として、本当に一隅を照らし切ったと云えましようね。夫に対しては非常に素直であり、親に対しては孝行、隣人に対しては親切という、そういう徹底した道を只一筋に通って来た、生れながらにして。

彼女は、今、考えてみますと、全く典型的な日本女性でございませうね。そして、経済生活にも、私は、自分の思うことは何でもやっていこうという生活でございませうが故に、経済的にも随分苦勞をさしました。そういう苦勞をです、苦勞と思わずに喜んで生涯を徹してきた。その為に二十年前に、ふと神の声が聞こえるようになりましたね。それも、何か自分のお腹の中のものが見えたといいことでございます。おかしなことだと思つたんですが、段々それが整理されまして、そして、実は神の声と思つていたのがそうでなかつたんだと、自分のみたまがものを云うようになったということが分つたんであります。それまで、又苦勞がございましたが、これが、彼女がそういう天啓的になつてからですね、数年後、今から十四、五年前に、そういう完成を遂げたんでございます。

つまり人間として完成を遂げた——だから天人でございませうね。そしてその時より十数年前より、私は毎晩のように、新しい道センターの場で天人の「垂示」を聞きます。それが私の話の素材でございませう。だから、元は天人にあるんでございます。

その予言はですね、予言といいますが、そういう言葉は、大和言葉ですから一寸分りにくいですが、試みに、私、こういう本を持って参りましたが、この中に日本が世紀の変わりという予言を具体的にこう云つております。これは十三年程前のことであります。

昼と夜とのあいあいを云うておこうかさあ~~~~

それが世紀の変わり目じゃ……（前後省略）

昼と夜とのあい／＼とは、夜であるか昼であるか分らない時が続くということです。

そういう方法によって人間をより分けることが出来る、——そういうことが世紀の変わりですから、この予言者の云っている一九九九年の七月という日は云っておりませんが、そういう時が近くやつてくると、三十年待たんと思えますね。少なくとも今後十年位にはそういう時代が来ると、

そうして、そういうことがありましてから真に靈性文明というものが起つてまいります。魂を主体として生きるといふ時代が来ます。魂というものがあるから生れてきたんですが、それは絶対の価値を持つておりますけれども、皆さんご存知ないから放つたらかしておる。そうでなくて、そういう真に価値あるものを価値づけていくといふ時代が来ますね。

そうしてまいりますと、日本の国が本当に建直つてまいると思います。従つて新しい道は、この道があるから世直りができる、国が助かるといふことを広言しております。

だから、人間の敵といふものは、どう考えましても人間の敵は正しく人間ですから、人間が変らなければどうにもなりません。結局は、どんなに法律があつても行政指導しても人間が變つていかなきゃどうにもなりません。そういう意味におきまして、人間がどう変るかといふことは知性に重きをおいたものが、人間自体の中心に存在しているところの、魂に主体性をおくといふ風な、百八十度の大転換をした処で、初めて可能だといふことでございます。

そういう時期が正に近づいております。だから新しい道は、今この道に繋つて修業している人は、立派になつた人は、親から子、孫、三代まで救われるといひます、三代といふと百年です。百年……百年したらどうなるかといふことです。地上天国ができてまいりましたら、地上生活といふものは終焉えんを告げます。百年したらねえ、もうこの地球上の人類は生存する必要はありませんですよ。魂だけになるんです。

言葉は神なりとキリスト教で云っております。言葉とは何か——音おんです。音というものは色々でございますが、最も次元の高い音は何かと申しますと、人間の魂です。究極的な存在ですね。魂というものは一種の波動ですね。つまり超々短波ですよ。次元の低い電氣的なはたらきは人間に感じますけれども、超々短波となると感じませんね。その靈的な超々短波ですから、それは人間の魂なんです。これは波動ですよ。言葉で出るんです、魂から……。それは我々の意識にも感覚にもかからない言葉なんです。

その言葉がですね、今迄の我々は因縁とか業を積んで色々な欲をもっておりますが故に、そこに所謂雑音がはいってきてその言葉を聞くことができない、受取ることができない。然し、この魂が本當に磨き切られたら、ダイヤモンドのように光つたら、天から続いておりますが故に天の究極的なものから続いておりますから、ここから天の経綸を聞くことができます。

そうなつて、そこまで人類がなつた時にですね、指導層の人々がそこまでになつた時に、真に地上に平和が建設されるんです。建設するということは、今迄の宗教的な大理想を實現する。我々の人類の最も高い最後の憧れというものが現実することになります。その時は肉体はいりません。魂だけでいいんです。

魂というものは感覺的な世界でございます。音楽とかそういう、いい感覺的な世界だけの生活でいいんです。

次元が高いですから。地上の肉体生活というものは、今後百年後において終焉えんを告げるといふことであります。大変なことですね、これ……。

これがお釈迦さんの末法世界さいぽうに出ずる所謂みらく弥勒の下生みろくです、弥勒の下生みろくということは天人の出現のことでございます。

こういうものが奇しくも日本に現実に行われているという事実をね、知って戴きたいと思ひます。指

導者の皆様方に。そうして、私の説明だけではいけません。私が故に、私は常に世間に向つては、私の云うことでなくて、その背後のものを知ってもらいたい……来たりてみよ、新しい道の場に来たりて見よと云うことを申します。

自分のみたまを拝むようになるのが本当なであります。自分のみたまを拝むのがこの道の主体でありまして、神仏はもう駄目なんだと、神仏というものはもう人間のみたまと次元の違う存在なんだと、人間のみたまそのものは究極的なところから戴いているんだということです。そこに到達するには、自分自身を錬成すること、自分の欲を捨て切るといふそういう生活をする以外にございませんね。苦勞を喜んで生活するということでございます。そうすると、自分のみたまが立派になりさえすれば、こゝ（肚）から無限の理が湧いて来るんであります。物にしても、無限供給の理がみたまでございます。分に應じたものが、生まれて参りまして自分の生活が安定致します。

だから、この道は国を助けるのが目的でありますけれども、その前に人を助ける、つまり、人作り、家作り、国作りという、こういう順序でございます。

所謂維新のように、自分の家を放つといて国事に奔走するといふんじやございません。時代が違います。自分を立派にして、そして家を整え、それから国に尽そうじやないかというのがこの道のあり方でございます。

まず、自分というものが出来なければどうにもならんということでございます。

そこで私は今日の時代を一言に申しておりますが、資本と技術の時代を経て、今、心よりも魂に回帰する文明の歴史的転機に立っているのが今だと申しております。

まだ足りない点が沢山ございますが、次回にお運び下さった時に申し上げたく存じます。

長くなりました。じゃこれで終ります。

新しい世にかざす

閑院純仁

私、司会者から紹介を受けました閑院純仁です。時間も過ぎておるのでお話するのはいかがでしょうかと思ひまして、それにてお話するような用意もしておらないんですが、折角の機会でありますから一言だけ申し上げようと思ひます。

今ここに天村先生がお出しになりました「大予言」という本がありましたが、実は、私、前に東京の書店であの本をちよつと見まして二、三日後に行つて買おうと思ひましたら、もう売切れでありまして、その他にこの本と似たような内容の「人類の滅亡」でしたが、こういう本が出ておりました。それを買つて来た訳であります、ことほどさように、こういう本は今、売行きがいんだらうと思ひます。すぐ売切れて、又似たような本がすぐ出てくる。そう

いう風に、こういう本を渴望しておるし、又、こういうことに好奇心があるのかどうか知りませんが、理解をもつてりになつた時代だと思ひます。

そこで、「天人」と云われる想像を絶する方が出現されて、そうして「新しい道」という。これまで全然なかつたような、初めての人ではちよつと理解の出来ないような道が厳に存在するということは、現代のようなこういう風な世の中において必然であると感じております。

日本沈没であるとか、人類の滅亡であるとか、或は地球の荒廃であるとかいう言葉は、数年前でありましたらそういうことを云う人もないし、又、云つたら非常に衝撃的な言葉と受取られるのでありましようが、現在ではむしろそれが

当然である、常識であるという風になってきておる。そういう風な所謂超非常時であります。そのことは今、天村先生から詳しくお話になりました通りで、現在という時点は過去の我々の合理的な科学知識では理解のできないような時代になってきておると云えましょう。

そこで今日のこの会合の趣旨であります、「天人」と云われる方のあり方、即ち「新しい道」の意義ということを知者に理解して頂きたいということで、本日のような会合

が設けられ、今後また回を重ねてこういう会合がもたれるであろうと思います。

私もこの道に籍を置きましてから五年になります。どうか皆様、今後もひとつこういう問題に関心を持って頂きたいということをお願いを致しましてご挨拶にかえたいと思います。
有難うございました。

「茶話会」挨拶要旨

魂の練成を

佐藤 三蔵

大阪でこういうような天村先生を囲んでの茶話会がある

ということを東京の人達が承りまして、何とか東京でも有

識者・指導者の方々が天村先生に月一回来て貰おうじやないかというような話がまとまりまして、東京では毎月十七日にオークラホテルでこのような茶話会を催すことに決定致しました。今月十七日にその第一回の会がある訳でございます。

そういう意味あい、今日、私、見学旁々更にまた今晚の場のおやかた様のご垂示を承りに来た訳でございますが、このように盛大な大阪の会を見まして本当に心から嬉しく思う次第でございます。

ある日、先生に「先生は若くお元気ですが、頭もちよつともボケた感じもありませんが、秘訣を教えて頂けませんか」と申しましたら、先程のお話にございましたように、「南無」だよと仰いました。

「南無」ってどういうことですかと云いましたら、今日皆さんにご説明されたように己を空しくすることだ。私もその為に場を訪れます。そして、「自分の魂を練成することだ」と教えられます。

私は医者でございますから、魂なんてものは初めは考えておりませんでした。科学的に肉体を使用すればいいんだ、こういうように考えておりましたが、魂があるから生かされてるんだということを聞かされました。

そこで我々は武器のない魂の練成ということに、これか

ら時代が変っていかなきゃなりませんが、先程の天村先生のお供をして福田大蔵大臣や、或は三木副総理にもついで参りましたが、田中法務大臣に会った時のお話はございませんでしたが、法務大臣は、あ、成程その通りです。私はこれ見て下さいと云って「耕心養心」と書いたものを天村先生に出されました。「心を耕し、心を養う、これが私（法務大臣）の真髄です」全く先生と同じ「耕心養心」「どうかその心を利己的な心でなしに、魂に変えて下さい」こういう風に先生が言いますと、手を握って「あ、よく分りました。私もそういう風に肚の政治を、魂の政治をこれからするように致します」こう云って法務大臣がああ絨氈の廊下をわざわざ先生を送って出られた、こういうような姿も拝見しました。

今日は、閑院様もいらつしやいます。この道があるから日本が助かるんだと云っていらつしやいます。そういう意味で只今全国で多数の同志がおやかた様のご垂示を承りご指導頂いておるのでございます。予定の時間も過ぎて恐縮でございます。今日は東京から参りまして、大阪地区の皆さんのお元気な姿を拝見し、この茶話会を東京でも大阪に劣らないように、我々がやっていかにやらんなあということを泌々感じた次第でございます。今日は本当に先生、そして皆様有難うございました。

人間の根を知る

市野光鵬

新しい通を通して頂いて

私は、新しい道につながる以前は、いろ／＼苦がありましたが、通らせて頂いて、今は、どんなことでも喜べる、然も真底から喜べるような自分にならせて頂きました。

苦と云うものは、通ってこそ、本当に有難いと云うことが分って参ります。

丁度「十」になるには「九」（苦）を通らなくては成り得ないように「苦にぶっつかった時には、有難いものが待つ

ているんだ」「これでいいんだ」とよろこんで通らせて頂い

ています。「有難い」と云う文字を裏返せば「難有り」である。難の有ることが実は有難いものであると思うようになりました。それまでは苦に遭えば「嫌だなあ、何とかしてその苦から逃げよう」とした私も、今はどんな苦でもよろこんで頂けるように変らせて頂き、日々是好日、と云った今日この頃でございます。

「道」とは通ってこそ道になるんで、いいお話を聞いて感心しても（勉強にはなるが）行じなくては道にはなりません。私は今から丁度十年前、新しい道にご縁を頂いて、素直に歩いて参りました、その道すがらには、嫌なことも、苦しいことも、納得しかねることも沢山ございました。

“どんなことでも喜べ”よろこべなかつたら、嘘でも喜ぶんですよ”と言われるまゝに、すべてを行と思つて通つて行く中に、どんな嫌な風でも雨でも、すべてが自分の心の持つて行きようによつて、有難いものになつてくると云うことが悟れるようになりました。

新しい道は、浮き世の信仰のように、幸福の彼岸を求めて向うへ／＼と行く道ではなくて、上へ／＼と上昇して、天に向つて棹さして行く道であることが分りました。

このような“天”にまで上昇して行ける道は、未だかつて何処にもなかつたのであります。

こうしたすばらしい道は、“天人”松木草垣女史によつて切り開かれた道でございます。人間としての最高の苦を、因縁とならば通らなくてはならない”と“忍従”の誠で、通り切られ、因縁を果し切られて、今から二十年前、齢、

五十二才の時“天人合一”の境地になられたのであります。そのお通りになつてこられた道すがらは、すべて“天”の意に添つて歩かれたのであります。天は“この松木草垣女史は人間にして人間ではない「天人」である”と命名され、その通られた“足跡”を「新しい道」と命名されたのであります。

「天人」のお名前も「新しい道」の名前も、人間の智慧で

附けた名前ではなく、天から、名付けられたものであります。

仮りの世は終つて本当の世に切替る

現在、上も下もいろんな問題で悩んでいる。石油問題を始め、公害問題、親子の問題、政治、教育、宗教等あらゆる分野にわたつて、誰もが“今どうしたらよいか、この先どうなるだろうか”と戸惑いどうするすべもなくかつて、凡てに行き詰りが来つてあります。

それは天の仕廻しによつて“当然来るべき”世の終り、末法の世、末世と云う時が、とう／＼目前にやつてきたのであります、これまでの世は“仮りの世”と云つて“本当の世”ではなかつたのであります。

これまでは宗教的真理、科学的真理、などを真理／＼と思つてきました。然しこれまで最高の教、最高の真理と思つて来たことも、新しい道のお話を聞いてすっかり變つてしまいました。仮りの世に於いて真理と思つていたことは仮りの真理であつて、本当の真理ではなかつたのです。

かつてコペルニクスが地動説を唱へたことがありました。それまでは、天動説が本当だと思つて、すべてのことは天動説と真理としてやつていたのです。

それと同じように、これまで真理と信じてきたものは実は、表の真理でありました。すべてものには「表」（見えるもの）があれば「裏」（見えないもの）があるように、裏の真理を知らなかったのです。

幹があれば枝もある、そして地下の見えないところには「根」があります。

これまでは仮りの世でありましたから、仮りの教（表の真理）で間に合つてきたのであります。

仮りの世（表）が終つて、本当の世（裏）に切り替ろうとしている、この大きな転換期に、相も変らず、上ツ側の真理を本当だと思つていと、いろ／＼のことが行き詰つて、遂にはぬきさしならない袋小路に入つて、どうしてよいか分らなくなり、こんな筈ではなかつたと、迷いに迷つて気を失ひ自滅するようになってしまふのであります。

私の立替つた動機

私は終戦まで学校の教師をしていました。終戦と同時に世の中は一変しました。教育の面でも、教育勅語はなくなり、アメリカの自由教育の波に押し流されて、学校教育はどうしてよいか分らなくなりました。

その時、或宗教のお話を聞いて、これこそ絶対の教えで

ある。これが本當の教育であると思つて、教職を退いて救いの道に、全身全霊を打ち込んできました。ところが教え祖の教祖が亡くなれば、時代はどん／＼變つてくるにつれて、いろ／＼な惱事なやみごとが次々と起つて、これまでの教えでは到底解決することが出来なくなり、どうしてよいか分らない立場に追いこまれていた時、一寸したことから、新しい道で説く「臍は神の座である」と云うことを知つた。

この言葉が脳裡に焼きついて離れない。とう／＼矢も楯もたまらなくなつて、一人ぼっちで「新しい道の場」を訪ねたのでございます。

仮りの自分と本當の自分

「天人」松本草垣女史のことを、私たちはおやかた様と申し上げている。そのおやかた様から「ご明断」を頂いたのです。ご明断と云うのは、その人その人の根（本當の自分）を教えてもらうことで「本當の自分」を知る一つの段階でございませう。

自分の前生から過去の通り越し、現在の動向、これからの先行きなどいろ／＼お話を頂いて、只々驚くことばかりでした。

これまで自分と云うものを或程度知っていたつもりでし

だが、その自分が怪しいものでした。上側の自分を本当の自分と思つていた愚かさをしみ／＼と感じたのです。

皆さんもきつと「本当の自分」でない仮りの自分を本当の自分と思つてゐるお方が沢山おられるではないかと思ひます。

「本当の自分は、これだ」と自信をもつてお答へ下さる方が何人いらつしやるでしょうか。

本当の親の意味を知らなかつた

本当の自分が分らないようでは、本当の親は？と聞かれた場合、暫しためらつて自信がなくなつてきてしまいます。生んで下さつた親は誰でも知つてゐる、確かに本当の親に相違ないけれども、もつと本当の親があるんです。

そのように仮りの世で、真理だと思つていたことはまだ、小学校、中学校程度の教えであつたのです。

これを「表の真理、幹の教、日さんの理、母の理」と云われているのです。

病気の治し方も本当ではなかつた

医学は進歩し、大病院は各所にたてられてゐる。一方、宗教でもおかげ信仰花ざかりで次々と大きな殿堂が建てら

れてきました。

然し仮りの世である限り仮りの治し方の域を脱すること、はむつかしかつたのです。

私は三十年前、現代医学の誤診を知らされ、或宗教に入つてお医者さんでも治らない病人を沢山治して来ました。

医者に見放された病人を健康にして救つたつもりでよこんでおりました。けれども今になつて見ると、本当の救いではなくて結局は、表だけの救い、仮りの救いで、真底から救い切れることは出来なかつたのです。

病院が多くなればなる程、病人は増加する、薬が次々と今までもよりもより強い新薬が生み出されると、それにつれて病気はだん／＼治りにくい「業病」が増え、今や「癌、癌」と言つて、ガンとたたきつけられた恰好になつてきました。

「癌」という字を見ると「瘡だれ」に品、その下に「山」を書いてある、病になるような毒物が山の如く積もつてゐる、と云う意味ではないでしょうか。

仮りの世の仮りの治し方は、いはば修繕である、しまいは修繕は出来なくなつて切り取らなくてはならなくなつて最後のいやな「断」切開手段にまでなるのであります。

今や肉体の病気に限らず、政治、教育、経済、公害、宗

教、一切合財が内も外も、病氣の状態で、どんなに修繕してもどうにもならない。今や大手術をしなくてはならない状態になって来たのであります。然も大手術がおくれたら一命が危いどころか国が危い、そういう瀬戸際にきているようです。

神の觀念の是正

終戦后、おかげ信仰的な神様が沢山出てきました。これも人間共が自分の慾を満たす為におかげを求める人が多くなってきたからでしょう。

その沢山の神様たちは、俺の宗教が絶対だ、いや俺の方が絶対だと云ってきましたが、果して絶対な神様がそんなに沢山ある筈はありません。

「絶対」は只一つしかない。いくら「万教帰一」のスローガンを掲げて見ても、どうにもならないのが現状であります。

私もこれまで神様の教えを真理と信じて、真理の具現に努力してきましたが、新しい道を知って見れば、これまでの神様の理は、天理教にしても、大本にしても、表の理であって、本当の理ではありませんでした、表があれば裏があり、表の神様は何れも裏の根から分れてきたもので、裏の

理が分っていないなかつたのです。その裏の理が「根の理」といつて、「天の理」であり、「新しい道」であります。

このことが分つた以上、これまでの神に対する觀念を是正しなければならなくなつてしまつたのであります。

そこで、何時までも、こうした大切なことをいい加減にしてはおけなくなつたので、これについて、更に具体的に述べてみたいと思ひます。

京都に天皇様がおいでになられたのは明治維新までです。それまでは徳川將軍様が「お上」と云われていた。明治維新になつて、將軍様も大名もなくなつて、天皇陛下が親政なさるようになって「お上」の姿は變つてしまいました。それまでの世は征夷大將軍という大権を天皇から与へられて「お上」と云う尊称を我がもの顔にして、国民に忠誠を尽くさせて「葵」のご紋は、天下ご免の勢でありました。ところが明治維新と共に將軍は大政を奉還されてから、本当の「お上」の姿が分つて、天皇陛下を中心に日本の国は一つにまとまつて明い御代に成つてきたのであります。神様の世界天上界も同じように、これまでは、仮の世であつて、天上界は国常立尊と云う神様が、天の將軍と呼ばれて、地球王としての大権を委託され、宗教と云うものを作り地上を支配されていたのであります。その神様のお

いになりましたところは「高天原」と云って、天上界の丑寅（東北）にその座があつたのです。

徳川幕府は最後に外国の黒船がやってきたことから国内はさわがしくなり外患内憂、こも／＼至つて、どうにもならなくなつて大政奉還が断行されたのであります。

それと同じ様に天の將軍国常立尊も、世の中が行き詰つて、このような邪悪の世の中は宗教（神の教）でもどうすることも出来なくなつて、これまでの天の將軍の大権を一切「天」に奉還しなくてはならない時となつたのです。

即ち「天」が自ら地上に現われて、この人類の行詰りをお救い下さることになつたのであります。

いよ／＼天の時がきた、神の時代は終つた……

こうした天の仕組は、とうの昔から仕組まれていたのであります。これを「世の建て替え」と云われるのであります。

新しい道の使命

一財切財をお創りになられた「天」（創造主神）が地上に現れて、（たねーから根になる）根の理（天の理）をこ垂示下されている、これが新しい道でございます。

今や仮りの世は、末世となり、世も終ろうと云う瀬戸際に立たされている、その為に予期しないような忌しいこと

が起つて、どう対処して行つたらよいのか分らない時がやつてきました。その為に用意して下さつたのが、この新しい道であります。

ですから、この道のお話を聞いて、いいお話を聞いた、又聞かしてもらいたい、と修養程度に考へられたり、これまでの宗教のように、半信半疑で、いい加減におとりになられたら残念でなりません。成程／＼と素直におとりになつて頂けたら、本當に有難いと思ひます。

臍を知ることによつて余が立ち替わる

「世直り」とは世の中が立直つて行く、「国の立て替え」とは国が立派に立て替つて行くことであります。

世直り、国の立て替えも、要は先づ個人個人が立ち替へることが根本であります。世は余に通ずるわけで、先づ自分の立て替えが急務中の急務でございます。

この道につながる迄は、自分を知っているようで、知らない、上ツ側の自分を本當の自分と思つていた方が大部分でした。

私もその一人でした。「臍」を教へて頂いて始めて、本當の自分を知つたのです。

へーい、そうですか？と云う位、臍と云うものに無関心だ

ったのです、実に臍と云うもの程不思議なものはありません。

「へ」と云う意味は一番先^{さき}っぽ「そ」とは一番もと（元）のことで、一番先に出来た一番もと、これが「臍」さんです。

日本の言葉には一語／＼深い意味があります。例へば

「夜」とか「昼」或は「朝」と云う言葉を見ても、暗いから夜と云う位に思っておりませんが、本当の意味は暗くなると一切のものが、中心に寄^よってくる、親元に寄^よってくる。

昼になると、すべてが中心から放^はれてゆく、池の水が乾^ひく、洗濯物が乾^ひくと云うように、夜に寄^よってきたものはさあ／＼と云って、日の出と同時に「ひる」が始まる。そして、朝とは日の出る前の一時を云うのです。

この見える臍さんは、肉体では一番最初に出来た「もと」であります。それは男の精子と女の卵子と結ばれて成った芥子粒^{けしりゅう}のような小さな核^{かく}で、そのたねが胎内で根を出す。

この根が臍の緒です。植物のたねが発育するように、自然に成育して、十月十日の間に、心臓も肺も胃も作られ、頭も手も足も出来て、立派な赤ちゃんとなって、オギヤールと誕生してくるのであります。「朝」と云う字はよく見ると、十月十日の文字から成っているのも不思議ではありません

か。

オギヤールと生れ出ると、これまで根の役目をした臍の緒は切られる。その時の切株が見える臍であります。

この生れ出る時にオギヤールの声が出なかつたら、生きることは出来ない。ですから産婆さんなどは赤ちゃんのお尻をた、いてでも声を出させることもあります。

何故この初声^{うづこゑ}が出ないと生きられないか不思議でしょう。この初声をあげる時の赤ちゃんは全身の力をふりしぼって出している、頭の智慧で出そうと思つて出しているのではないことはお分りでしょう。

このうぶ声を赤ちゃんの口からのどを通して、更にその奥をたどれば、その発声の源は肚であることが分ります。

オギヤ／＼と泣くこの音は、人によつて音色^{ねいろ}が異つていゝる、この初声こそ―赤ちゃんがこの大自然に根（音）を下したことになる。これこそ「つく息」と云われて、この「つく息」によつて生命が保たれているのです。

この音の元（根元）は、身の内の肚にある、それが本当の人間の息の根元であります。

この身の内にある、見えない息の根元を日本人は「みたま」と呼んでいる（西洋人は靈魂^{れいこん}）

この「みたま」が「人間の根」であつて、これが本当の

自分でありませう。

このみたまこそ、真空そのもので、このみたまに、つく息と吐く息が埋められているのであります。

このオギャーの声を出すことによって、この大自然から生きるに必要な、「空気」を吸収する力が出て肺が働くようになり、水を呑む力も働き、胃も心臓も働き出すのであります。

要するに、これまで知らなかった、人間の根はみたまであつて、これが本当の自分である。然もこの「みたま」は天の分れであり、天の可愛子でございます。

本当の親を知らなかつた

こうした生命のもとである「たね」を蒔いて下さつたのは誰であろうお父さんであつた、そのたねを育てて下さる畑のお役がお母さんであつた。

ですから、父を天、母を地と云われています。

このようにして目に見えない「たね」はお父さんから！そのお父さんの「たね」は父、父、父とたどって行けば、その元の元は、大自然をお創りになられた、創造主神であるるのであります。我々のみたまは天の分けみたまであることを知れば知る程、如何に尊い価値であるかがお分り

になられると思ひます。こうした尊い価値を人間はもつておりながら、自分の価値を知らないで、上皮的慾望やあるいは自我に左右されて、本当の価値を忘れ果てていたのであります。

本当の価値を知る

立派な自分を作る、俺は立派になる、と云つても、それは頭の方に智慧を仕込んだり、金や物を沢山ためて財産を作つたり、名与や地位にあこがれて、見える表側の自分の欲を満たすことに汲々としてきたのであります。

本当の自分は「みたま」であつて、昔の人は自分のことを「あたひ」と云つていたほどで、このみたまさんにこそ本当の価値があるので、このみたまを立派にすることが、価値を価値にすることでありませう。こうして根を肥やし太らせ、立派にすることによつて、徳がいやましてくるので、これを天徳、人徳といつて、永遠に朽ちない宝であります。今日までお互いが、有難い／＼みたまさんに対して、有難い／＼のあの字も考へないで、みたまさんの喜ぶようにと考へたことは一度もなかつた、甘い／＼人生を送つていたのであります。

甘い／＼人生とは云うまでもなく、身が苦になるような

ことをつとめて避けてきたのでありました。

実はみたまさんは、きびしく／＼自分の仕憎いことを仕替えるよう苦を苦としないでよろこんで通る、**「身が苦」**といつて、上側の自分が苦しむような場合が有難いのです。そうしたことによつて、根であるみたまは磨かれて立派になつて行くものでした。

稲と云う草は昔から**「いのちのねぐさ」**と云つて、人間にとつては大切なものです。

この稲に化学肥料をやりますと、稲株は沢山に分れて、すばらしい草丈になりますが、その根を見るとまことに貧弱なものです。こうした稲は最後の収穫時には予想外に収量が少い、米の質もよくないのです。

根を忘れた育て方をすると上側は如何にも立派そうに見えても、見えない根の方は少しもよろこんでは下さらないのです。

皆さんの臍さんは、そうだ／＼とうなずいているようですが如何でしょうか。

みたま磨きは根を立派にすることである

人間は死んでから始めて、**「みたまの供養」**と云うことに気がついて、靈魂を弔う為に心を砕きますが、生きてい

る時こそ、もつと／＼大切にしなければならなかつた筈です。

「人は蝶よ花よと云うたとして、息一つが蝶よ花よ」であつて、どんなに金や財産、地位があつても、自分が生きていると云うことが元になるのです、この世でどんなに、金や物を持つていても、その人の根であるみたまさんが、立派に磨かれ、澄み清まつて、丸い／＼まん丸いみたまさんになつていなかつたら、その人の長い一生は、仇ごとになつたことになつてしまいます。

艱難汝を玉にする

昔から**「艱難汝を玉にする」**と云う諺がある。それに、我々のみたまを立派に磨くことであります。

「身が苦」といつて、みたまが磨かれる場合は上側の自分にとつては苦であるけれども、その苦を苦としないで、有難く頂く気持になつた時、根であるみたまは立派に磨かれて行くのであります。

艱難とは苦に遭遇することである、これをよろこんで頂く時にこそ本当の自分は磨かれてゆくものであります。

九(苦)というものからどんなに逃げようとしても、逃げれば逃げる程、九(苦)は却つて大きな九(苦)となつ

て、自分に返ってくるものであります。

例えて申上げれば、九を二回逃げたら、 $2 \times 9 \parallel 18$ (九)、三回逃げて、 $3 \times 9 \parallel 27$ (九)、九回も逃げたらもう大丈夫だろうと思つても、 $9 \times 9 \parallel 81$ (九)で、数理で示してくれるように、苦というものから、永遠に逃げきることは出来ません。逃げれば逃げる程、苦汁は増すばかりでしょう。遂には自ら墓穴を掘つて自滅してゆくのみです。

艱難は汝を玉にする、

若い時には苦を買つてもせよ

今になって有難い言葉であると、つくづく思います。

仮りの世に、大きな借り(業)

仮りの世に、仮りの教を、本当の教と思つて通つてきた結果は、仮りは借りにも通じるように、天から見られた場合、大きな借り(業)となり、お互の「根」である、みたまが泥まみれになっている人が多いのです。

泥まみれになっている。借りを業と云われています。

人間は輪廻転生を繰り返しては、生れ変わってくるもの。我々が生れてくる前の世、前世に於て、人をだまして金をとつたり、盗棒をはたらく、人殺しをしたとかの悪事は勿論のこと、根であるみたまさんが苦しみなげくような

ことをした場合、みたまは汚れて、「前生の業」となつて、この世に持ち越して生れてくるのであります。この世に生れて来て、また「みたまさんの嫌がることを繰返して」とすれば、それが埃りとなつて、「今世の業」となるのであります。

こうした業は、どうしても果さなくてはならないもので、何かの形(病氣、災難)になつて現れてくるものです。

人間は生れ出る時に、大きな因縁を背負わされて生れます。

必ずそうした因縁は、良きにつけ悪きにつけ、果さなくてはならないように約束されているのであります。

その果し方は、その人々によつて異つており、病氣の形で果す人もあり、大きな怪我をさせられたり、道楽息子の為に苦勞させられたり、大きな苦にぶつかっている時は大抵、前世の業、今世の業の何れかを果すべく見せられている時であります。

そうした場合、何んとかして逃げようとするものであるが、逃げれば逃げるほど却つて業の上に又業が積み重ねられて、より以上の大きな苦をなめなければならなくなってしまうのです。

苦を苦としないでよろこんで通る

京都は竹林の多いことで有名である、竹には立派な節があります、あの節があるから、どんな雪にも、どんな風にも耐え得ることが出来る、又あの節（苦）を見て、竹の根は如何に頑丈であることも分ります。

竹の節をよく見ると、中は真空（無心）で外側は両手を上下にして合掌している恰好をしている、そしてこの節から枝が出ています。

人生にも沢山な節がある。人生の節は昔から「苦節」といって、沢山な苦節を通つたもの程、立派な人になつていきます。成功した人、有難い人と云われるような人は皆んなこうした苦に遭遇した場合、竹のように節毎に有難く伏し拝んで通り切られた方でありませう。

みたまを磨くには、どんな苦でも有難く伏しおがむ気持ちで頂いて通る時に、みたまは磨かれ、根は張って、丈丈と上昇して行くのであります。

みたまが磨かれ、澄み浄まってくれば、生きながらにしてその人のみたまは霊層界を越えて、天上来に住することが出来るのであります。そのようにみたまが上昇してくると、嫌なことも耳に入らなくなり、見ることもなくなつてくるのです、何時も嫌なことがばかり聞く、交通事故などを

よく見せられる人は、その人のみたまが汚れて、下層界にあるからであります。

結極、みたまが磨かれて浄まってくれば、生きながらにその人のみたまは極楽浄土に住居しているのであります。これまでは金や物で取引されて、戒名をよくしてもらい、沢山なお経をあげて頂いて、極楽浄土へ案内されるかのようにならされて来た、こうしたことは実は仮りの世の法の世界の姿であつて、果してみたまさんは極楽浄土に行くのでありませうか。

どうしても、生きている間に、苦をよろこんで通る、どんな因縁でも、因縁ならば有難く頂いて通り切つてこそ、みたまは磨かれて上昇し上昇して、遂に天に還る（昇天）ことが出来るのであります。

みたまを磨くにはよろこびが大切

更にみたまを磨く上に大切なことは「よろこぶ」ことであります。先程申しましたように、どんな苦でも苦を苦としないで喜んで通る、これが最も肝腎であります。

人間は喜ぶことによつて、陽気になります。気が陽になれば、気は血と云つて、血は温かくなつて、血液はサラ／＼と流れるようになりますが、陰気になると、血液は冷

たくなり、血液は鬱血しやすくなります。鬱血が続けば、濁血になって、病氣の原因になってくるものです。

気を陽にするには、日頃／＼の心の持ち方が大切です。

「自然は親なり」で親は有難く頂くべきものです。何時、どこで、どのようなことがあっても、成つてきた姿を、有難く頂くようにすることが大切です。

例えばどこかへ行こうとする時、折悪く雨が降ってくる、自分にとつては有難くない雨、喜べない雨、そう云う時に降ってきた雨は止めることは出来ませんが嫌な雨も自分の心の持つて行き方一つで、有難い雨に変へることが出来るのです。

ここで、ころ／＼で、自分の気持次第でどうにでも成つてきます。

真底からのお詫びが大切

お詫びすると云うことが、どんなに大事であるかと云うことは、三才の童児でも知っています。

悪いことをした場合、御神前や仏壇の前に行つて、南無／＼してお詫びしなさい、と教えられてきました。

然し、有難い身の内のみたまさんにお詫びすると云うことは知らなかつたのです。みたまは、天の分けみたまで、

身の内にあつて何時も我々を見て下さっています。

自分の心の思い方が、間違つていた場合、真底からみたまさんにお詫びをすれば、チャーンと受けとつて下さるんです。

御神体にお詫びする場合は天と地との違いがあります。既にお話し申上げたように、我々のみたまさんは、絶対なる天の分れであり、そんじよそらの神様とは格が違つております。

よく壁に耳あり、障子に目あり、と言われるように、このみたまさんは、何時でも、どこへでも、ついて廻つて見てくれていますから、どうしようもありません、だん／＼みたまさんが磨かれ成育して立派になりますと、変な思い方をしたり、間違つた行いをしたりすると、「おいら何をするんだ」そんな思い方はとんでもないぞと、叱られる場合があります。きびしいみたまの性の方の場合には特に顕著であります。

怪我をして痛い／＼と大騒ぎする場合など、みたまさんから叱られている姿であります。

「怪我」とは怪しい我、我れの心が怪しいのであつたからであります、誰のせいでもない、自分の心の思い方が、みたまさんの思いに添わないことをしていたからで即座に詫

びる必要があります。

真まことの実行が大切

お詫びと云つても、口先ばかりで、まことのお詫びでなければ、みたまさんは受けとつて下さらない。みたまさんには自分の思いは全部分るからどうしようもありません。

「実行」とは、実じつうを行いずる、と云うことで、口先きばかりで本当に行じなければ「嘘うそ」ということになります。

今日迄は、仮りの世であり、仮りの契りと云つて本当の世ではなかった、実じつの世よに対して、虚きよの世よの中であつたのです、実行と云う言葉はありますが、それは不言実行と有言実行とか云つて、上皮の見える面の実行をさして云つていたにすぎなかつた。真実まことの実行とは程遠いものでありました。「実じつう」（みたまさんの思い通り）を行じてこそ本当の実行と云われるもので、すべてのことが、成つて成つて成りほうだい、「おかげは鈴なり」となつてくるものです。

みたまさんの思いに添うことが大切

これまでの宗教で、御神体や仏像を拜んで、おかげを頂くとする在り方は、本当ではなかつたのです。

御神体も仏像も、救いの方便に使われたものですが中には御神体みかみ即神様かみと思つて拜んでいる方もあつたのです。救われたと云うのは、実は、南無／＼と云つて拜むことによつて「慾心」がなくなつて、日頃／＼の行じ方、思い方が、自分のみたまさんの思いに添うようになつて来たからであります。その「みたま」は「親」であります。親は根であります。根である親が喜ぶようになれば、一切合財がよくなつて来るのであります。

自然の樹木は根をよるこぶようにしてあげたら、地上の幹も枝も葉も嬉々として元気な姿になってきます。

人間もみたまさんが喜び、陽々になれば、身上、事情の心配は消滅して、逆におかげが湧いてくるのです。

世の立替と新しい道

仮りの世の末世の行き詰りを、天なる親が地上の人類をお救い下さる為に大自然の仕廻しによつて成つてきたのが新しい道でございます。

人間はもと／＼天の分れであり、天の可愛子でございます。太古の時代には、本当の道を素直に歩いて神代の御世を楽しんで暮してきました。ところが人間の智慧が発達するにつれて、自分欲が強くなりすぎて、天なる親に反抗し

て、自由を求めて横道（欲の道）の方に走りすぎてしまつたのです。

時代が進むにつれて、横道の方が幅を広げて、本道を歩くものが少くなり、横道が本道のようになって、本道は旧道と化して、自然にさびれてしまったのであります。

旧道と思われてきたのが実は本道であつたのです。

この横道を本道と思つていた世の中を、「仮りの世」と云われるのであります。

日本では、元々、親の言うことをどうしても聞かないで自分の好き勝手をする子供に對して、「親から勘当される」と云うことがあります。

勘当される子は「業」の子でありました。

人間は、生れてくる時に、みたまさんを分ち与えられて「人間に本来かくあるべし」と、天なる親から示し申されているのであります。それなのに甘い仮りの世に馴らされて自分勝手な行動をとつてきた為に、何時の間にか埃りを積んで、長い歲月の間に「業」となって、人にも、家にも国にも、沢山な業が溜つてしまつたのであります。

今日の公害問題、石油の危機などの、忌わしい問題は、政治家、宗教家、教育者のみの責任ではなく、国民一人一人が負わなくてはならない業であります。

世の立替え、とは横道からすっかり足を洗い、本道に立ち替ることです。

その為には、これまでの業の精算、大きな借りを果さなくてはならないのであります。

多少なりとも、前生の業、今生の業をもっている以上はどうすることも出来ません。業の果しの為に身上や、事情の上に現れて、病氣、災難などの形でいろ／＼と苦を通らせられるのであります。このことを、越すに越せない通るに通れない、大峠というのであります。

こうした人間の業を、お救い下さる為に、「天人」松木草垣女史をこの世に降されたのであります。ですから、天は

「この女は業とり女」と言われているのであります。

業があつたのでは、本当の世に切り替へることはむづかしいので、その為には「新しい道」を素直に信じて、喜んではい／＼で、お通り頂く以外にないのであります。

この稿をお読みいたゞいて、大変よろこびになつておられるお方は、皆さんの「みたまさん」であります。

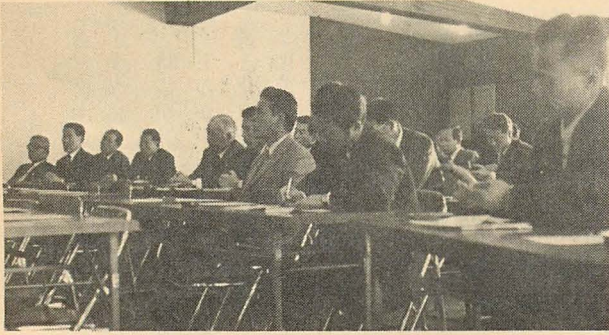
それに引きくらべて、頭の方は半信半疑のお方が多いのではないかと思います。是非一度、一日も早く我れと思われたお方は、新しい道にお出で下さるよう、お待ちしております。

本田技研鈴鹿工場

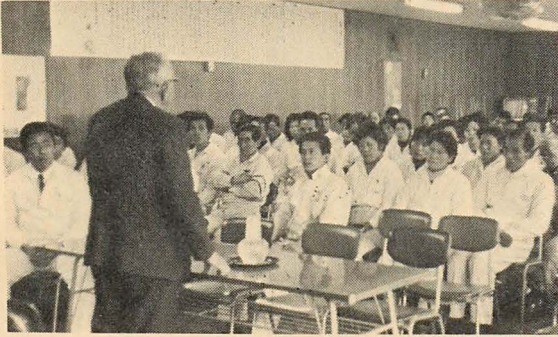
協力工場七代会新年例会に招かれて

新しい道センター主官 松木天村

七代会新年例会における天村先生の講話
— スカサキキットホールにて —



小林製作所鈴鹿工場における天村先生の講話



元海軍工廊跡に本田技研鈴鹿工場を建設する時、本田社長が、全員の創意工夫によって、鈴鹿にモデル工場を造れと指令した。当時の全社員の平均年齢は二十四―五才であったが、この人達の惜しみなく出し合った知恵と力は、実に見事な大工場を建設した。そして、百億円に達したと云われたその建築費も僅か二、三年で元をとり戻し諸設備や機械類等も四年間で原価消却してしまったということである。

私は、この本田自動車工場の所在地である鈴鹿市に向うべく、去る一月二十五日午前九時半大阪南郊の羽曳野市（新しい道センター）から車で約二時間半ドライブした。同乗者は、本田技研協力会七代会々長小林亀男氏と、桑名新日本工業社長後藤保氏で、このお二人は申すまでもなく、熱心な道友である。

鈴鹿市に入ったとたん、私の目に映った大きな建物は、市立鈴鹿短大であるが、聞くところによると、この学校は本田氏が市民のために創設寄贈したとのことである。

市の中央部とみられる所に前記の大工場が偉容を構えその周辺に散在する中小工場数十ヶ所は、みなその協力工場であると云われる。

遙か彼方には、一大レジャー観光施設として夙に有名な鈴鹿サーキットが視線を奪った。広漠四十万坪というその荘大さは目をみはるばかりだった。

この日招かれた七日会例会は、此処のホテルサーキットで催される。

「伊勢は津でもつ、津は伊勢でもつ」という俗謡のごとく、全く「鈴鹿は本田でもつ 本田は鈴鹿でもつ」の感が深い。

やがて車は小林製作所鈴鹿工場の門に入った。

工場長の出迎えを受けて、一行は社長室で昼食を頂いた。

昼食後、先きに工員、社員約八十名にお話しすることになり、それから工場見学となった。素人の私にとっては、機械、設備のことなど色々詳しく説明されても、たゞ、「あーそうですか」としか答えられないが、敷地五千坪にも及ぶ、この工場内をはじめ、事務所その他の諸設備は、まこ

とに良く整屯されているのには驚いた。

さすが道友の企業である。厳しさと明るさとしかも発展への旺盛した雰囲気を感じられた。

その後、午後一時からは、七日会例会がサーキット会議室で開かれた。

私は、その席上「非常時日本は何処へゆく」と題して、約一時間半にわたって講演した。

「……石油等エネルギー資源の問題にみられるごとく、消費と生産の国際的力関係の中で、諸物価高騰にあえぎつ、ある非常時日本は、今後何処へ行こうとしているのか。むろんこのことは、唯に日本だけの問題ではない。知性偏重の近代文化が生み落した大きな世界的悲劇であり、地球を喰いはじめた人類が、自ら墓穴を掘って奈落の底に近づきつ、ある姿に他ならない。

即刻、日本人は日本人らしく、世界の人々に先がけて魂の目を開き、知性偏重物質万能の迷妄をふり捨てて、大和魂を振起することが必要である。

これが日本を救い世界を平和へ導く唯一つの残された道である。

新しい道では、人間の本当は肉体でもなく、心でもなく魂であることを教え、そして一人々々の魂をゆきぶり起

して更に修練する場であります。……」

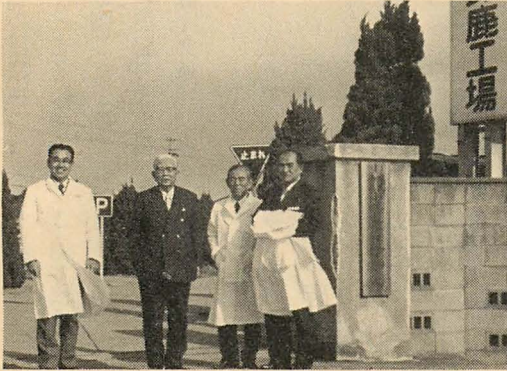
講演の後、三時半からホテルレストランで催された祝賀パーティーに出席し、四時過ぎ退席した。

その後、再び車中の人となって夕闇迫る国道を東に走った。やがて到着した榊原温泉で入浴―旅塵を落して、小林、後藤両氏と夕食を共にしながら、夜十一時頃まで歓談の花

サーキットホテルにおけるパーティにて



小林製作所鈴鹿工場入口に立つ
右から小林亀男氏、中島和一氏、天村先生、後藤保氏



を咲かせて寝についた。

尚、書き遅れたが、サーキットパーティーでは、三重県の道友数名と、関東からは中島和一氏、福田治六氏がわざわざ出席されたことが嬉しかった。

尚、本日の七日会講演会にご出席された方々は、左記企業の社長及び工場長等で八十余名にのぼり大変活気があつた。

本田技研工業(株)	鈴鹿総合(株)	日新工業(株)
小林製作所	スタンレー電気(株)	日通商事(株)
アイコク工業(株)	高尾金属(株)	(株)日本陸送
浦田精機(株)	高橋硝子(株)	福田プレス(株)
一志工業所	スチールセンター	平田プレス(株)
大塚ゴム化学(株)	田中製作所	不二化学(株)
川野辺製作所	田中パイプ(株)	フロンテア工業(株)
協栄金属工業(株)	東海メッキ工業(株)	(株)ホンダエクスプレス
光洋精機(株)	東京シート(株)	ホンダ運送(株)
三恵技研工業(株)	東和熱化工(有)	開発総業(株)
三秀プレス(株)	東洋電装(株)	(株)鈴鹿サーキット
(株)棲葉シボリ	鳥居塗装(株)	(株)増田製作所
武蔵精密(株)	柳河精機(株)	大同工業(株)
森六商事(株)	山下ゴム(株)	電気興業(株)
八千代工業(株)	ユアサ電池サービス(株)	小太刀製作所

中曾根通産大臣と 天村先生の会談

(株)小林製作所社長 道友 小林 亀 男

かねてから、私は中曾根通産大臣と松木天村先生との会談の機会をつくるよう、その連絡の任を命ぜられていました。

ちょうどその頃、国会は委員会の真最中で、折しもヤマニ石油相の来日中とあって、話題の渦中にあつた中曾根大臣はとてもお忙しく、果して、時間の繰り合せが出来るかどうか案じていました。

ところが、去る一月二十八日午後、全大臣の余田秘書から電話が入り、「大臣が天村先生とお会いしたい」とのご返事を頂いたので、直ちに大阪の新しい道道センターに連絡致しました。

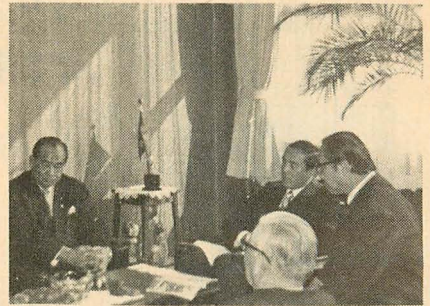
松木天村先生は、翌三十日、日航機で上京され、私は羽

田空港にお迎えして、砂防会館の大臣事務所へお約束の時間通り、午後二時に参上し、大臣と天村先生をお引き合せしたのであります。

ところが、天村先生が劈頭、大臣に紹介されたのは、この日同行した仙台在住の道友、木村豊治氏であります。

木村氏は、昨年十月から今日に至るまで、灯油、ガソリンの安売りを継続し、販売制限とせり上る価上げで騒いでいる世間の耳目を集めていました。

こういうトピックをマスコミが見逃すはずはありません。「正義の反骨—ガソリンの安値提供」と、朝日、読売等に大きくその記事が掲載されたりしましたが、一方、氏は、時折、通産省の出先機関に呼び出され、「組合の統



制を乱してはいけない」と、その安売りを警告されてい
たのであります。

天村先生は、石油販売業界のこうした実状を知って頂くこ
とも、大臣に対するお土産になるのではないかと考えられ
て、たま／＼大阪の新しい道センターに逗留中の木村豊治
氏を同行されたのである。

こうしたいきさつから、今回の会談の内容は予期しない
方向に向い、主として大臣と木村氏とのやりとりになった
のであります。以下はその一問一答ですが、会談後、天村
先生は「この会談は木村君のために行つたようなものだが、
その方が却って良かったね」と可々大笑された。

大臣「ガソリンは現在幾らで売っていますか」

木村「レギュラーで七十五円。ハイオクが八十五円です」

大臣「そんな安値で今後も続けられるんですか」

木村「私の取扱っている石油は無印石油で、業転品と申し
まして、仕入先は申されませんが、かなり自由に、し
かも相当量を手出来します。従つて今後も継続する予
定です」

大臣「そうですね。それで、商売として成り立つんですか
ね」

木村「レギュラー七十五円でも十円は儲けさせて貰つてい

ますし、元買いで三十円位は儲かっていると
言っております。

私は、通産省から呼出されて、「統制を乱してはいけ
ない」と度々注意を受けるんですが、現在のよう
な狂乱時代に、何故石油類を安く提供することが悪いのか
と、大いに反撥を感じますね」

大臣「それは我々にとつても大変有難いことです。

我々が、いくら法律に基づく行政指導をしても、石油
業者そのものが、貴殿方のような気になつてもら
はならない点があるんです。

木村さん大いに頑張つて下さい」

101

宮城版

ガソリン 販売量ガタ落ち

値上げを予定は強気

マイカー族が節約

供給不足 売り急ぐ気配

バス 通勤に
変えました

1リットル75円に値下げ

◆独自の仕入れ経路

猛益 ↓ 仙台は100円

杉野 上子 順 1 円で良否

こうして木村氏は大いに面目をほどこしたが、その時、天村先生は次のように話された。

天村「今、木村氏から販売業者の取引実状をお聞きになった通りですが、大臣のお話の通り、如何に行政指導をしまして、結局は徹底した実行が出来ないのが普通です。

要は、自覚ですね。

人間の敵は正しく人間だから、人間そのものの、考
え方、見方が百八十度転換しなければ、どうにもなりません。

新しい道では、この意味で立派な真面目な人間づくりに二十年前から取り組んでおります。立派な人間とは、知性だけに頼らない肚の出来た人間——つまり、魂の磨かれた人間らしい人間のことを云います。

拝啓 厳寒の候益々御健勝のこととお喜び申し上げます。

先日は折角の先生の貴重な時間を、私のために御割愛戴き中曾根通産大臣との御引見の労を賜わり、誠に有難うございました。お陰様で心情の一端を吐露する機会に恵まれ、私の進むべき道が益々固まってきたように思われます。これも偏に先生始め同志の皆様の暖かい御指導御援助の賜と心から感謝いたしております。今後更に皆様と共に新しい道にいそしみたいと思っておりますので、御指導御鞭撻の程お願い申し上げます。寒さ厳しき折、御自愛賜わるよう祈り上げます。

松 木 天 村 先 生

木 村 豊 治 拝

敬具

心即知性だけでは、どうしても最終的には慾に振り廻わされ、利己的な結果になります。特にこれからの

日本を、世界を良くするには、魂を磨いて、失われた人間性の回復につとめることが目下の急務です。

今日では、木村君のような方や、小林氏のような立派な経営者が、北は北海道から南は九州まで、全国各地に新しい道の道友が輩出しています。

天村先生は、ちようと、「あさ」の巻頭言として掲載する予定の原稿を持参しておられたので、それを読んで大臣に聞いて頂き、（本誌の巻頭言参照）大いに共鳴された。

なお、この日、松木先生がかねてから懇意な参議院議員で、今回通産省政務次官に就任された楠正俊先生も同席され、錦上花を添えた形となって和やかな会談のできたことは大変有難い次第であった。

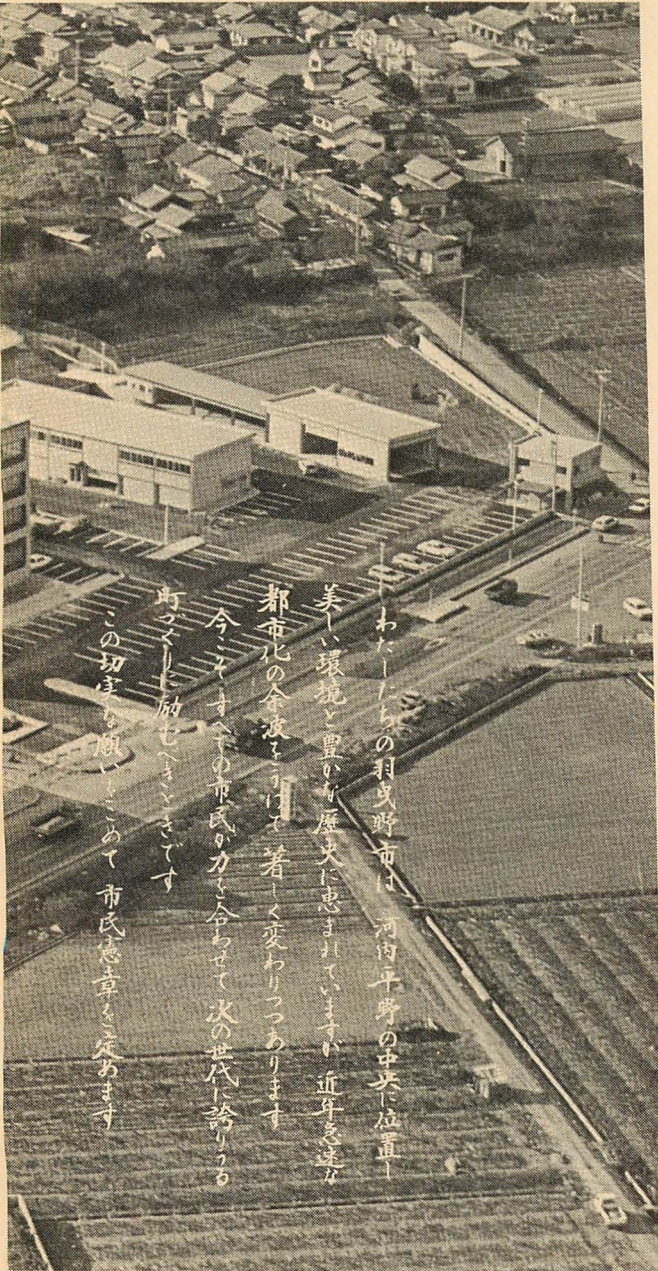
羽曳野市

新市庁舎落成
市制施行十五周年

祝賀式に招かれて有感

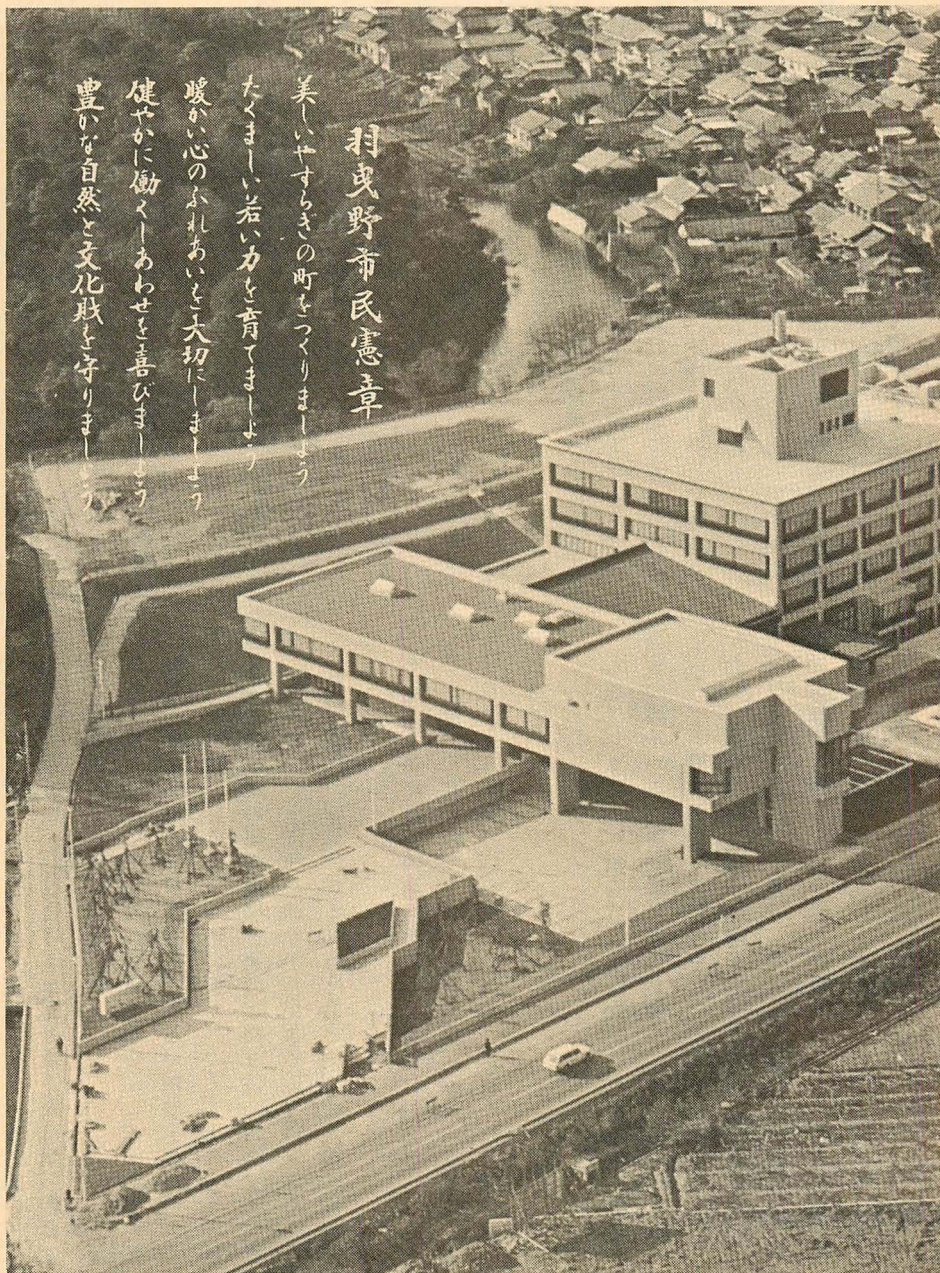
新しい道センター主管

松 木 天 村



わたしたちの羽曳野市は、河内平野の中央に位置し、美しい環境と豊かな歴史に恵まれています。近年急速な都市化の急激な進行で著しく変わりつつあります。今こそ、すべての市民の力を合せて、次の世代に誇りつづける町づくりを励ましてまいります。この切實をお願いし、こめて、市民憲章を定めます。

落成なった羽曳野市新市庁舎



羽曳野市民憲章

美しいやすらぎの町をつくりましょ
たくましい若い力を育てましょ
暖かい心のおれあいも大切にましょ
健やかに働くとあわせを喜びましょ
豊かな自然と文化財を守りましょ

敷地面積 20884.13m²

建築面積 10108.44m²

去る一月十一日、羽曳野市市制施行十五周年記念と併せて挙行せられた、新市庁舎落成の祝賀式に招かれて参じた。新市庁舎は、前に応神天皇陵、後ろにその陪塚を控え、古い歴史と美しい緑の環境の地に相応しい瀟洒な近代建築であった。

近隣の六ヶ町村合併により、十五年前に市制が施行された当時の羽曳野市は、市とは名ばかりの、人口三万少々、人家もまばらで、天皇の陵や古墳がそこ、に散在し、その濃い緑の間にぶどう畑や桃の花が色彩りを添える、静かな田舎町にすぎなかった。

奇しくも時を同じゅうして、新しい道は、大阪府阿倍野区王寺町から、当羽曳野市植生野（現在羽曳野市はびきの）の丘陵に、その本拠を移したのであった。

当時の羽曳野市庁舎は、津田市長のお言葉の中にもある通り、旧日赤古市診療所をその儘転用して使用せられていた木造の老朽建築で、どんな地方の町村役場でもこれ程のオンボロ建物はなからうという酷い建物で、今日に到る迄市民は等しく新庁舎の建設を願っていたのである。

従って、新しい道は、昭和四十六年に至り施設の大増設が俊成したのでこれを記念して羽曳野新市庁舎建設促進の意味を込めて、金壺百万円也を、市に寄贈させて戴いた。

処で、羽曳野市は、折からの開発ブームの波に乗って、年々急速に変貌し、発足当時僅か三万余の人口が、今日では九万余を数える迄に発展した。

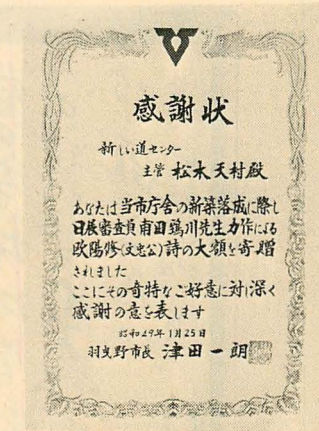
これと軌を一にして、新しい道の間も、この十五年の間に幾多の紆余曲折を経ながらも、著しい伸展を遂げた。即ち、当時数十名の道友（道に繋がった人）と、赤土の狭隘な敷地に急造の研修道場を建て、移り住んだのであったが、今日では、全国津々浦々から集まる道友はひきもきらず、敷地面積も建物面積も新市庁舎と同様の規模に拡充した。

そして、古い日本の道統を新しく現代に甦らせ、「人づくり、家づくり、国づくり」を旗標に、混迷の度を加える今日の社会に光明の灯をともしべく、日夜不断の精進を続けて来た。

人類は今まさに、頭脳智（知性文明）による遠心的進歩発展の段階から、腹脳智（靈性文明）による求心的完成へと向うべき歴史的な一大転換期に立たされている。

新しい道は、既に二十年前から、このことを声を大にして叫び続けて来たのである。今にして思えば、こゝ、陵寝の聖地羽曳野に新しい道の間が建設されたのは、蓋し理の当然であり、天意の然らしむるところであつたと思われる。

今日、羽曳野市の一市民として待望久しかった新市庁舎が立派に完成し、その祝賀式典にご招待戴いて参列して感激一入なるを覚えた。



津田市長から贈られた感謝状

願わくば、今日の良き日を契機として、羽曳野市役所の職員の方々は申すに及ばず、市長、市議会議員の方々は右左の主義の対立を超え、且つ旧弊を捨て去って、古い歴史の伝統を新しく現代に甦らせて華を咲かせた聖地にふさわしい、新しい立派な町づくりに、一層ご精励あらんことを、そして、その市民殿堂にふさわしく、今日以降旧庁舎のように「スト断行」などという、みにくい赤いピラなどベタベタ張りめぐらさないよう念願するものである。

尚、今回日展審査員の甫田鶏川氏の作品（別記の通り）を津田市長に贈呈した。

—— 昭和四十九年一月十五日・新しい道の場にて記す

ごあいさつ

市制施行十五周年の新春を迎えて、待望久しい新市庁舎が完成しましたことは、誠にめでたくよろこびにたえません。これもひとえに市民の皆さまが特に地元住民の方々のご協力の賜ものでありまして、こゝに厚く御礼申し上げます。

かえりみまずと、南大阪町以来使用してまいりました庁舎は、もと日赤古市診療所の建物を改築したものでありまして、すでに老朽化し人口の急増と行政需要の増大にもなつて機構は拡大し、庁舎は極度に狹隘となり、いくつにも分散して住民の皆さんには多大のご不便をおかけし

てまいりました。

また、事務処理の上にも多くの支障をきたし、行政効率の低下を余儀なくされてまいったのでありますが、こゝに新庁舎が完成した今、私は市職員共々に心を新たにして行政水準の向上をはかり、市民各位の信頼に應えてまいる所存であります。

この記念すべき時にあたり、明日にむかつてはばたく羽曳野市の象徴ともいふべき、新庁舎の姿を皆さまにご披露申し上げ、いっそうのご協力をお願い申し上げる次第であります。

昭和四十九年一月

羽曳野市長 津田一朗

一、日展審査員 羽曳野在住 甫田 鶏川 書

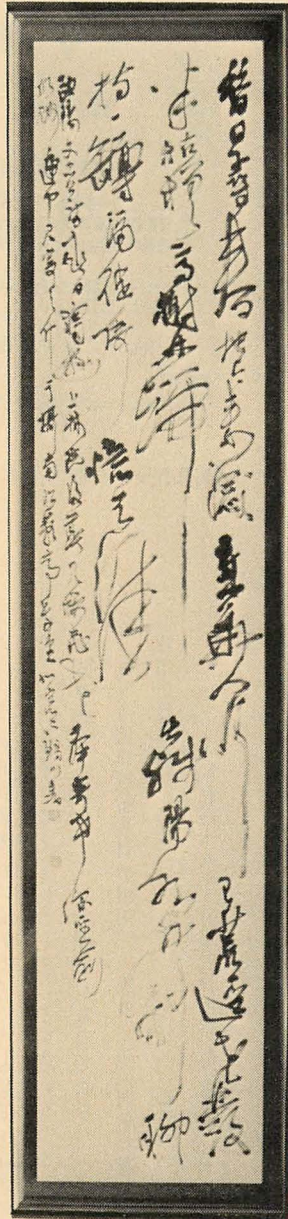
縦の大額 (縦二一〇センチメートル 横五二センチメートル)

歐陽修 (文忠公) 詩一連

羽曳野市庁舎落成お祝いの為め贈ります。

新しい道センター 主管 松木 天村

羽曳野市長 津田 一朗 殿



訳文 歐陽修 (文忠公) 詩

春日独り上林院後亭に遊び、桜桃花を

見て、希深聖俞に寄せ奉る。

仍て通中寄せらるるの仕に酬ゆ。

甫田 鶏川 書 昭和四十四年度 日展菊花賞受賞作品

昔日春尋ぬるの地 今来歳華感ず

人行きて巳に荒径 花ひらいて半ば枯槎たり

高榭林端に出で、残陽水外斜なり

聊か一罇の酒を持して、徒倚して天涯を憶う

▼下座をするからこの道がいとしい。

▼下座にもいろ／＼。新しい道は身を挺する。でも、それはしにくい人もある。処で、一切合財身を落す気持、その気になつて幾日か幾十日かを試すんですわな。

▼偉くなつたら地べたへ頭をこするんじや。下座じや／＼。下座とは頭をこすりつけるんじや、それが本当の本当。手前が偉くなつたら、頭をもう一度地につけや。

▼自分をさげて、下げて、兎にも角にも下座をする。それが本当。自分を下げらんえ。それを嫌うとあかんのえ。この道の理、下座がはじめです。下座を知らないと、中半、中半。土下座ですよ。土下座からですよ。

▼下座の気持を忘れないわな。それによつてみたまさんがお前を抱いてくれるわな。

▼下座は人に頭をすりつける。天は見通してある。我に向いや。あんな野郎、こないな野郎にかて下座しいや。親は長の年月下座じやつた。親じやで、親じやで。

▼自分らは言わされるんじや、言わしてもらう。そのことを下座と謂う。

下座

座談会(その二)

▼下座が一番とくしますんえ。

▼凡てが凡て自分が足らんと思つたら、これが万物を先に立て、おる証拠じや。これで偉いもんになる。下座の精神、皆は取り込みや。道はいつまでも、ご苦労さん／＼ご苦労／＼にあける。互同志ご苦労／＼／＼にあける。ご苦労ごつここれが下座じや。



「つく息の理」に感じて



中島和一氏

中島 私は、この道に繋がらせて頂いて六ヶ月目位の頃、松の間でおやかた様から「中島さん、あなた、今ではないんですけれども、いずれね。」というお言葉を頂きました、その時は何を意味するものかよくわかりませんが、以来、どうもそのお言葉が頭の中に残っておりまして、時に触れ、折に触れて気にかかっておつたんです。

ちょうどその頃のことではありますが、私の紹介で道友となられた十名の方々が、突然、場へ戻られなくなり、自分の力の足りなさをつくづく身に泌みて感じさせられたのであります。これは、自分が早くこの道に徹しきらなかつたならば、この人々と共に場に居ることが出来

なくなるんじゃないか。という不安が湧いて参りまして、この道に徹するにはやはり下座をさせて頂くことが絶対必要だと気附かせて頂きました。

そうして昭和四十四年の十二月に、やはり松の間でおやかた様から「あなた、二日、三日では半端ですよ」と言うお言葉を頂きました。それで、年改まったならば、一週間や十日間ぐらいは下座させて貰わんといかんなあ、そういう思いになりました、四十五年の一月から毎月七日間位、場に居らせて貰つたんです。

すると、二月二十一日のお仕込みで「お前、ところの理を知つたなあ……」というお言葉を頂きました、更に「あなたは自由な身であるにもかかわらず、まだ自由を奪われているんだ。さあ、お前どうする、お前さん男ならやるんだ、やるんだ、やるんだ、やるんだ……」というお言葉をいただきました。もうこれは、このままではいかん……”という気持ちにならせて頂きました。

ちょうどその頃、「矛盾を超えて」や「天の理」「教の泉」など読ませて頂いて

おり、中でも特に「下座の理」ところの理「つく息の理」に深く感銘し、おやかた様が「現在、道の者が、内輪に向けての下座がまだ／＼足りない、遅れている」と、時折、ご垂示の中で仰られるわけが、なんとなく解ってきたような気がいたしました。

「我々道の者が内輪に下座出来ずして外に向つて下座出来るわけがない」ということに気を附かして頂き、なんとかしなければ……”という思いでおりましたところ、昭和四十六年五月九日の晩でした。松の間でおやかた様に「七月から三ヶ月の下座をさせて頂きます」ということを、つい言わされてしまいました。すぐ後で「こまつたなあ」と思いましたけれども、一旦言つたことは、どうも取返しがつかんと思いかえし、ここで腹を決めさせて頂いたのであります。

しかしながら、この時はまだ、家族にも社員の誰にも言っておりませんでした。が、社員にはかねがね「いずれ一ヶ月や二ヶ月は、突然、大阪の方へ行ってしまうことがあるかも知れない。その時には

よろしく頼む」というようなことを絶えず言っておりましたものだから、それ程気にしていませんでしたし、また、帰ってからこのことを社員に話しましたが誰からも、抵抗はありませんでした。

このようなわけで、私は、松の間のおやかた様のお言葉、そしてお仕込み、ご垂示等によって、なんとなく「この道をやり了すには、まづ三ヶ月の下座をさせて頂かないと、どうしようもないなあ」というような思いが—まあ、身の内からのつき上げでしょう—か—そういう思いが出て来まして、とうとう下座に踏みきったわけでございます。

それからまた、特に「つくいきの理」を読ませて頂いて、下座による三ヶ月間の潔済で、「男の氣」というものを紫の間で結集しなければないんだということをはっきり分らせて貰いました。だから我々は道の子として、男として当然のこと三ヶ月のお行をさせて貰はねばならないでない、と、「つく息の理」を載くことはむつかしく、途中ですっこけるんじゃないかという思いがありました。

こういったことが、下座のお行に入らせて頂く動機になっていました。

その他、まだ下座中の不思議な、有難い体験は沢山ありますけれど、大変長くなりますので、下座に入らせて頂くまでの経過だけを話させて頂きました。司会 どうも有難うございました。それは、次に私（原）司会役ではございますが、やはり皆様と同様、下座させて頂きましたので、順によって、私も語らせて頂きます。

男の涙



原高千代氏

原 私は昭和四十六年の十月から十二月までの三ヶ月間下座させて頂きました。特に感じました点を二、三申させて頂きます。

その一つは、本当に男の涙というもの

は、こういう時に出すものであるかなあと、思わせられたことがあります。

それは、下座仲間であった非常に男らしい方で、ふつうならば人に涙を見せるような方ではないと思える様なその人が自分のしにくい点をやりかえるということについての二、三人の小練合いの席で、しみじみと自分のしにくさをふり返って自分をしい変えることのむつかしさ、不申斐なさを述べられました。そして、おやかた様に対して誠に申し訳ないと、ぼとりと涙を流されました。

それを見せつけられました時に、なる程これが、道に繋がらせて頂いた男の涙かなあと、こう感じたわけでございます。

で、私達が三ヶ月の下座に入らせて頂く、自分づくりに一生懸命になるわけですが、ともすれば、これが自分の為の自分づくりになり勝ちですが、その方の場合は、本当に自分をここでつくらなければ、おやかた様に対して申し訳けないと、こういう本気の本気の心情が、その涙の奥底に秘んでいるということを、私

はその時感じとらせて頂きました。

自分を放って、そしてこの道に励ませて頂くと、いわず、いわず、まあ男の涙と見えますか、そういうものを見せて頂きました。

見えない糸でつながって

それから二つ目は、三ヶ月のお行も半ばを過ぎて最終月に入ってきましたと、私達十四名の仲間は、何とはなしに、見えない糸で繋がっているという感じが段々深くなっているのに気づくようになりました。

たま／＼雨の日なんかには、みんな何時とはなしに同じ下座部屋に集ってくるわけですが、そういう時お互、何も話合はなくても何か知らほの／＼とした温かいものが通い合っているんだなあーと思わせられるのです。これが、はらからであるということかなあー、相々というのはこういうことかなあーと、そう思わせて頂いたわけです。

三ヶ月の間、浮世のことも忘れ、ひたすらに下座のお行に専念出来るわけです

から、だん／＼心が澄みきって参りました、そうなるべくると自然に天の仕廻しとして、お互が和の輪になってくるんじやなろうかと、大変有難い気持ちにならせて頂きました。

それから三つ目は、下座のお行の最後に、みんな揃ってご面接をいただきましたが、その時こういうお言葉を頂きました。それは、

「あなた方は三月のお行をされましたが、それは嘘じゃなかったでしょうね。嘘じゃないでしょうね」ということです。

その時は、はっと思ったんですが、そのお言葉の裏を読ませて頂きました時、どーんと胸を鋭くいかれたような思いをしました。

それは「あなた方は、一応は形だけではなくやっただよに見えるけれども、それが本当であったかどうかは浮世に帰ってからの、あなた方の在り方で実証されるんですよ。あなたの方の、これからの行じ方が大切です」ということでした。

三ヶ月間、精いっぱいやらせて頂いたという気持ちをもっておりましただけに、

この後が大変だなあと思いました。浮世にもどってからは、本当に天のお意（ころ）に添わせて頂くようなお行（ぎょう）の仕方に精進させて頂かなかつたならば、この道の子として申しわけないという気持ちにならせて頂いた訳でございます。

ともすれば、それを忘れ勝ちになりますが、時々、そういうお言葉を思いおこして、現在もお行だお行だということをして、自ら言いきかせながら日々を過ごさせて頂いておるようなわけでございます。どうも有難うございます。

「ハイ」の実行



榎木康之氏

榎木 私は、四十六年一月から三ヶ月の下座をさせて頂きました。

下座については、先程話されました、先輩の中島さんや福田さんからその下座

体験を通しての素晴らしいお話を聞かせて頂いており、また菅原先生のご助言もあつたりして、是非やらせて頂きたいと前々から思つておりました。

ところが、その前年の五月に、娘ムコを貰つたばかりでございましたし、小さい会社ではありますが商売をやつておりまして、当時ドルシヨックの影響をうけて、のびきならないことがあつたりして、なか／＼思い切つて下座に入らせて頂く決心がつきかねていました。けれども、ある日松の間でおやかた様にそのことを申し上げますと「それは有難いことですよ」と言うお言葉を頂きまして、はじめで、それまでの人間思案といひますか、霞のかかつたような思ひが、スーツとなくなつて決心がついたわけでございます。その後、色んな周囲の反対もありましたが、とにかく一旦決めたことだから、それは自分に言いよかせながら受け流しておつたわけでございます。

こうして、なんだかんだでございまして、年明けて昭和四十六年の一月初場から下座に入らせて頂きました。

この下座期間中に特に印象深く体験させて頂いたことは、素直に「ハイ」と言うことと、人をいただくということでございます。

それは、現在の場の駐車場の一部には、当時まだ工場の古ぼけたコンクリートの建物がありまして、外側から見るとなか／＼頑丈そうなものでしたが、平井谷先生から「下座作業の先づはじめに、これをこわすんだ。それで道具は、南條さんがこういうものをもつてきて下さつたので、これを使ってやるんだ」ということを言われました。その時「先生、これを壊すんですか？」と突嗟に口から出てしまひまして「ハイ」とは言えなかつたのでございます。

その時には気が附かなかつたんですが、その取り壊し作業が大体終りに近くなつた頃になつて、はじめに「ハイ」と言えなかつたことに気がついたのでございます。

普段、松の間なんかでは、おやかた様に「ハイ」「ハイ」と返事はするけれども現実には自分にとっての大きな苦に直面し

た時には、なか／＼「ハイ」が言えないもんだなあと、しみ／＼人間思案の愚かさを感じたのでございます。

それ以来、これからは如何なることがあつても「ハイ」と返事をしよう」と自分に言い聞かせて居つたのでございますが、それから一ヶ月も経たないうちに、また同じような愚をくり返してしまひました。

それは、また別に汚い小屋がありまして、平井谷先生から「今度はこれを壊すんだ。古い方は壊してもいいけれど、新しい方の小屋は壊さないで、そのまま、隣のプラスチック工場の裏側の空地に移動させるんだ」と言われました。その時も「いや、まっつて下さいよ。そんな事は、まづ大工さんに見て貰つてそれから、作業にかからせて貰ひます」というようなことを言つちやつたわけですね。その作業も皆さんの協力によつて難なく終つてしまつたわけですが、本場に事に臨んで素直に「ハイ」と言えない自分を反省させられました。

下座の一番初手である「ハイ」すらま

だ出来てないじゃないか、下座とはとんでもない—と、自分をぶんなぐる思いになつたのでございます。

人を頂く喜びを知る

次に人を頂くということについて体験したことです、下座仲間の中で一人の若い人について非常に苦にしていたことがあります。

それは、もう二ヶ月も経っているのに、その人は胃が悪いとか何とかで、作業も芯から手につかない様子でした。本当に身体具合が悪いのか、それとも真面目にやる気がないからなのか分らないような恰好でしたので、その人に対する仕向けようをいつも苦にしていました。

ある日、松の間も終つて就寝前のひととき、みんな一緒に食べるために買ってあつたパンを、いち早く食べにかかるとです。それで、それまで、その人のことを胃が悪いのか、真剣味がないのかというふうな思いでみておつたために、ついカツとなりまして、一人に一つづつしか買つてないものをお前勝手に食べてお

つては皆が食べられなくなるじゃないかと、どやしつけようと思つたんです。けれど、その時二回ほど生ツバをのみまして気を落ちつけたので、教え諭すような気持で、その人にじっくりと話すことが出来たのでございます。

それから四日程過ぎましたら、他の若い人が、「棚木さん、実はこないだの晩のこと、彼が、非常に申し訳なかつた」と言つて私のところへ来てすぐ反省して言いましたよ」と、こう言われました。その時、私はやっぱりどやしつけないでよかつたなと思つと共に、自分は人の悪いところばかり見て、いい面を見ていなかったんじゃないか、人を頂いてなかつたんだなということは今更のように気が附かされました。

というのは、その頃、彼が松の間でおやかた様に、心境報告をした際、おやかた様は「そうー、元気でやりなさいよ」と大変温かいお言葉を返されたのを聞きまして、何と私は人の悪いところばかりに気をとられて、思いやりがなかつたな、本当に申し訳ない。ごめんなさい、自分

で自分に詫びたのでございます。

そうしましたら、翌日からその人が一八〇度変りました。本人のやるごとが何もかもまるきつきり打つて変つたように、積極的にシャベルを持って力仕事に精出しはじめたのでございます。

人を頂くということがこんなに素晴らしいことか、と自分ながら驚き、ホツとしたわけでございます。

その後、下座も終り近くなつた三月二十四日は、その人にお仕込みがあつて『！お前さん生れ変つた！』という素晴らしいお言葉を頂かれたのでございます。その時私は目頭があつくなつて参りました、色々悟られました。

はらから

それから、三ヶ月も終り近くなつた時に思ひましたことは—これは何方もそうでしょうけれど、はらから（同胞）とは、こういうものなんだなあ—という、その素晴らしさであります。

私は軍隊生活を永くやつておりましたが、それは階級的な厳しさによつて統率

されている——といえますか、公的権威によつて統率されている制度でありますので、かえつて芯から敬服して従つてゆける指揮官というのは割合に少なかったと思います。

私の仕えた上官は、一人しかなかつたわけですが、私がやつぱり、そういう立場であつた時に中隊長はどう思われたかと云うことを、ふと思ひ起こして反省させられたんでございます。と同時に、この三ヶ月の間に、何時の間にか、下座の者同志、お互いに何を言つても通じ合えるものを感じて参りまして、これが本当のはらからの姿だなあ、素晴らしいなあと思ひました。

日本の国民の一人々々がみんな、こういう姿に立ちかえらなければならぬんだと、——これは一ツの教えだなと感じさせて頂いたわけでございます。

こうして下座を終わつて家へ帰つてみますと、商売の方も順調に進んでおりまして、本当に信ずる誠に天が乗るといってお言葉を身をもつて体験させて頂き、より一層確信を得させて頂いたわけござ

います。

これからますます、やる気を出してやらせて貰う。そういう気持ちでございます。有難うございました。

自からすゝんでやつてこそ



鮫島泰男氏

鮫島 私は四十七年四月から六月までの下座長をさせて頂きました。

三ヶ月の下座に入る動機と申しますと、私は長年墮性でやってきたような気がして、どうしてもここら辺で一つ切替えないといかんといい様な気持ちで居りましたところ、家内の母親と家内と、前後して十日間ずつ下座をやらせていたゞいた訳です。それで今度は私の番かなーと思つておやかた様に「十日位下座をした方がいゝ、でしょうか」と尋ねましたところ、「あなた、十日でも百日でもやんなさい」

とこうおつしやるんですね。そばにお嬢さんがいらつしやいまして「鮫ちゃん百日というのと三月じやないの」と指で数えてこう言仰られました。これは三月やれということだと思つて決心した訳です。

一月になつて松の間で三ヶ月の下座をやらしていたゞきますと申上げますとおやかた様は「あ、やつとふんざりついたか」といふようなお顔されてました。やはりこの道は悟りの道ですから言われたからするといふんではなく自分から進んでやる気が大切なんだなとその時思ひました。そしてこの機会に何とかしてこれで自分を建て替えないといかんとこゝういふ気持ちになつた訳です。

引込み思案を叩かれて

それでいろ／＼と準備の都合がありまして(その時丁度事業場を都内から埼玉県に移す最中であつたものですから)ほんとならもつと早くやりたかつたんですが、四月からになつてしまいました。それでもまだ時期的には会社をごたゞくしております、なにもかも中途半端でし

たけれども、人間思案をしていてはいつになつても下座に入れないと思つていと、三月になつて、突然お仕込があつた訳です。私は三ヶ月の下座に入る決心でしたので、よもやお仕込なんか有る筈が無いと思つておつたんですね。ところがそのお仕込の中で「お前さん自分を作つて天への報謝、それだけではあかんのえ」とあつたんですね。私はそれではと思つたんですね。そして「お前はことわりたいたらうけど断つてはだめだとおつしやる」と言われるんですね。私は困つたなあと思つてね、そんな、はれがましいといふか、その生意気な事をするのは一番嫌な性でね、もう引込み思案でハキのないことだし、と自分の性格を本当に嫌と思つてゐるんですね、おやかた様は私のその点を思いやりでもつて叩こうとしていられるんだな」と気が付いて、有難いな」と思いました。

それから入らしてもらつたわけですが、

私の時から急に下座の人員がふくれあがつてね、三ヶ月が二十名と短期が九名、合計二十九名になつたんです。

それで、私はもうそれから一ヶ月半程はね、自分の立場を非常に重荷にしたといふんですか、ま、毎日非常に苦しかつた訳です。

それ迄私は肩なんか凝つたことはなかつたんですけれどね、肩のこりが急にひどくなつて、あんなに苦しいとは思つてもいなかつたんですね。こう息がつかまる様になるんですね。それで、或時、松の間の発言の時のお返し言葉がありましてね、「あなたね感謝していますか」とおつしやるんですね。私は一寸どきまぎしましたし、本当はどういう意味か分りませんでした。長年の習慣でとつせんでしたんですが、返事をしたんです。だけど、おやかた様はどう云う意味で云われたんか悟れないと思つてね、三回くり返して云われたんですね。そして気が弱いか気が小さいとかね、そういう様な事をいわれてね、はづかしい思いをしました。

そして、しばらく考えていたんですが、あくる日になつてから、あつそうだと思ひました。

私はやつぱり自分を造ることにのみ力をそ、いで来たんですね、それで十年近くたつてもまだ出来ないんだ。その考えは違つていたな、と気付いたんです。

やつぱりこの下座の二十人の方は天からの引廻しで、自分の因縁として寄つて来ているんだから、この人達を全部いたゞく事によつて自分造りが出来るんだな」と思ひまして頂きました。そして、人の悪い所が見えたら自分にあるんだな」と思つて掘らしていたゞく。そうしたらその一ヶ所ずつでも良くなるんだな」とに角全員がね、喜んで立派になつていたゞくことが、つまり、いつか知らん自分に返つてくると云うことですね。そこに氣付かせて貰つたんです。そして、下座に入る前に頂いたお仕込の意味がわかつたんです。そして気が小さいとか細いとか言われたのは、あまりよくよするの肩がこつたんだということも氣付かせて頂きました。

そのお言葉があつた翌晩に、事故があつたんです。それは支部長からの申送りで週に一回失業保険を取りに行かして下さいと言われていた〇〇さんと云う人が安定所に行くだけだから外出させてほしいというんで、私は簡単に考えて許可しましたんです。だけど、「朝早く出て、なるべく夕方早く帰る様、家には絶対寄らぬ様」言い渡してあつたんです。ところが、その前の晩に道友の車で家へ帰ってしまったんです。そして赤飯を家で炊いて自家用車に積んで場に帰る途中、居ねむり運転でガードレールにぶつかつて即死したんですね。

私は下座に入る前おやかた様に「途中で家に帰つては駄目よ」と冗談の様に云われて「いやそんな事しません」と自分の事に考えていましたが、あの時もう既に注意されていたんだなあと深く反省しました。そして、もし前の晩にお言葉がなかつたら気の小さい私は気が動転してどうかなつたと思いますね。

その事件のあつた後は忘れた様にね肩のこりがなくなつてしまつたんです。本

当に色々と教えられ悟られました。

そして、その私の一ヶ月半の体験がありましたんで、苦を喜ぶと云う事—まあ私は喜びが足りなくて苦にするたちですから、自分で身をもって体験さして貰つたことによつてですね。三ヶ月目に入つてから四、五人の人が発熱した時にその経験が役に立つたんです。

何か知らん自分の

せんならん苦を…

この三ヶ月のお行と云うのは自分の身をつくお行なんです。わずか三ヶ月の間に臍にして下さる訳ですがそれがおやかた様の情で、どうしても苦が足りないとか苦を逃げようとする習慣が人間にはありますので、熱を出すとか、病気をさすとか、そういう事によつて苦を足してやる、苦から逃れられない様にしてしまうらしいんです。三ヶ月の下座がへそにならせて頂く早道だと云われるんですから、やつぱり一べん通り与えられる苦だから喜ばんといかんと自分自分に云い聞かしたんです。

私は黒板にね『やつぱり何かしらん自分のせんならん苦をさして貰つて、今日も良かったなあ』と書かして貰つたんです。それによつてですね、だんだんと思いを切換えて喜ぶ方向に持つて行く様にしたんです。

お蔭様で非常に喜ばれましたね、思いの切換を自分自身でされてですね、そして無事に下座を終わられたその喜びと、下座仲間の皆さんの最後のおしこみを聞かしていたゞきながらほんとなによかつたなあ、自分の事の様に嬉しくて涙が出ました。

下座をした人の話をいろいろ聞きましたら、留守中のかえつて事業面はうまく行つたと云う話が多かつたので、私も期待して帰つたんですが、なんだかまあめちやめちやで吃驚りしたんです。

今迄自分を掘らないで、い、加減な経営をしていたんで仕方ないとは思いましたが、しかしよく考えて見ますと、今迄こまかいお得意さんがいつぱいあつたんですが、それが下座中に全部整理されているんです。そして、わずか三軒のお

得意さんに集約されているんですね、それから普通であれば石川島幡磨重工業と云う所なんか、直接取引してくれる訳がないんですが、こちらから働きかけた訳でもないのに向うから積極的に契約してくれたんですね。これは一つに私の下座が終わった時におやかた様から『あなたは今からこの道の専属ですよ』と云われた事と思いわせて、その身を楽にさせていたゞいたんだなあ。と、そして、この道につくせと云う天の仕廻しだと思います。とりとめもない話をしましたが、こう云う機会がありまして、またひとつ思いを新たにしてこの道のために尽し果しさせて頂きたいと思つて居ります。ありがとうございます。

下座をさせて頂くまで



氏家栄夫氏

氏家 私 は昭和四十七年七月から九月

迄三ヶ月の下座をさせて頂きました。まず最初に、下座をさせて頂きました通りすがりから簡単にお話させて頂きます。

道に繋がらせて頂いたのが、昭和四十三年十一月十九日です。この道は因縁によつて通らされると云われていますが、全く、その通りで、この十九日にはその後いろ／＼な面で深い因縁によつて、しい廻されております。

つながらせて頂いた当時は、殆んど、夕方場に戻つて翌朝家へいなせて貰うというトンボ返り程度でしたが、或る日、「年内に三日間いらつしやいませんか」とおやかた様からお言葉を頂き、年の瀬も押し迫つた十二月十九日から三日間、場に戻らせて頂いたわけです。そして、翌四十四年になりました。毎月一日だけ戻らせて頂いております。九月に頂いたお仕込みで「お前さん、五日間もどれませんか」と云うお言葉を頂きました。それから毎月、「今月こそは約束を履行させて頂こう」と努めたのですが、十月、十一月も不履行し、倒々教務室か

ら催促まで受けまして、暮の十二月十九日から五日間、場に戻されたわけです。そうこうしているうちに、昭和四十五年の四月のある日、今度は「お前さん、天はフト言う。月半（つきはん）どうじゃー」という御垂示を頂いたのであります。どうしようもない魂（みたま）のことで、

たゞ素直に「ハイ」と、出来れば一日も早くそうなりたいと念ずるのみでした。その年の五月から現在の当番制が施かれ、その一員としてのお役を頂戴したわけですが、こうしたこと、天は前もつて、三日、五日と通らせて下さつたおかげで実に不思議や神祕を見せられながら通らされたのであります。

（註）「月半（つきはん）」は月のうち十五日間、お行として「場」に逗留すること

自分の甘さを知る

とにかく、トンボ返りの通りしか出来ない。思ひのなか。自分が、五日の当番も、難なく出来、その年の八月には、明断者をお連れして戻り、当番で戻り、且つ、夏季研修会等で戻り、日数を計算し

ますと、十六日間も場に戻らさせて頂いたわけで、前回のお仕込みにありました「月半」は、このようにしてやらせて頂いたわけです。まずこれで一区切出来、内心やれ〜と云う一服感があったのでしよう。次のお仕込みには「お前さん今の在り方では中半じゃ。この際、道にザンブリ……どうじゃ」。

これで自分の甘さを知らされ同年（昭和四十五年）十一月のお式から十九日まで十日間の下座に入らせて頂いたわけです。最終日の十一月十九日は繋がらせて頂いてから満二ケ年になり、またこの日の御垂示が「天意現成」を示された日で、全く有難くおうけさせて頂いた次第であります。

昭和四十六年中は、二回程、十日間の下座をさせて頂き、昭和四十七年の一月に、本年七月から三ヶ月の下座をさせて頂くとうと腹ぎめさせて頂き、先生に申し出たわけです。それから三月のお式の御垂示に「今年九月の終場から、あしたの祈り」を行う」というお言葉があり、不思議な、しい廻しだなあ〜と感じ

た次第です。七月までの半年間、身の廻りのことはスムーズに整理が付き、難なく下座に入らせて頂くことが出来たわけです。

苦を買わされて

六月三十日、いよ〜翌日からの下座に入らせて頂くために場に戻らせて頂くとお前今度の下座の責任者をやれ」と先生から言われ、あまり突然のことで「私ごとき者が……」とお断わり申上げたのですが「お前にやれということはお前に苦をさせることだ。苦を喜んでるのがこの道だから、喜んでやらせて頂くんだ」と強調されたものだから、ただ〜「ハイ」と言ってお引受けさせて頂いた次第です。それにしても、大変な時期に大役を仰せつかったものです。場では昭和四十五年五月頃から新館増築の工事が始められ、最後の仕上げの時、整理や移転が大変なときであり、また九月の「明日の祈り」のこと等で、下座者も長期二十七名短期は延べ四十名という大世帯になり、特に七月から九月という

夏季中のことですので、何か一つ、しっかりした「キメ」をつくってやらねば下座行は通り了せないと思い、三つの「キメ」を作らせて頂いたのであります。

それは

①整理整屯に努めること

②夏は身体がだるくなるので、つい横になりがちである。そこで、この期間中は、絶対横にならない（横臥しな）

③すべて、開始五分前に集合すること以上の三つであります。

通ってこそ有難い

下座期間中は、言葉では言いつくせない程のお徳も頂戴いたしました。それだけに、その当時は全く苦の連続でした。平均年齢が私より五つも年上であり、下座者が一時は下座部屋に入れなくて、予約制度をとり入れさせて頂いたり、日々の作業は山程あり、その手配やら問題処理やらで、日々忙殺せられていたわけです。

特に八月一日、二日、三日の暑さは特

別で、天はこの三ヶ日でそれぞれ五日づつのお徳を下されたのであります。八月のお式前後には夏季研修が行われ、場はムセ返るような状態でした。また、これに前後して病人が続出し、その看護に追われる状態になって、名実共に大変なやまばを通らせられました。

「お前に苦をさせるため……」と言われた言葉が身にしみたわけです。三ヶ月目の九月十六日に台風二十号が、風速五十米で場を襲い、全員四時間有余にわたって全身びしょぬれで植木やら端材の散乱防止に努めたのであります。それ以後は、台風一過と共に、やることなすこと凡てが順風満帆で、最後まで最高のお徳を頂戴することが出来た次第です。

今後すべきこと

最高のお徳を頂戴した三ヶ月間は天からの大きな借りです。一刻も早く、みたま通りになり、天への報謝に努めなければならぬことを痛感いたします。

それにしても、御縁があつて同じ時期に三ヶ月のお行が出来た者として、一層

のハキをもつて和の輪になっていくことが大切であろうと思います。

毎月のお式の前後に「ねり合い」やら「作業の手伝い」やら「懇親会」やらを重ね、お互がより一層深く知り合う様努めておりますが、今後より親密に連絡し合い、和の輪を強固にもつて、天への報謝に努めてゆく所存でございます。

跳び越して万全を……



浅倉一二三氏

浅倉 私は昭和四十八年の一月から下座のお行に入らせて頂きましたが、今思いますと、その前年の九月八日お式の晩にお仕込みを頂いたのが、きっかけになっていたように思われます。と申しますのは、例によって、その夜の松の間は最前列に位置し、おやかた様にお仕込みに対する御礼と、これに対する心構えを申し

上げさせて頂きましたが、その後尾にフト「年明けて四十八年の一月から三月まで下座修業のお許しを頂きたい」と、お腹（なか）から発言させられ、後になって吾ながら驚いた始末でした。

勿論、そんなことは家内にも伴にも相談した訳でもありません。従いまして、早速、家族の誤解と協力を得なければなりません。

そこで、家へ帰りましてから三日目の夕食後、家族全員の前で突如、三ヶ月下座の話を持ち出し、理解協力を願ひ出ましたところ、家内はじめ皆啞然としてしまいました。

会社経営と一家の柱として、或は丁度、年令的に働き良い格構とい、ますか、社会公共的な役職を背負いこんでいる身です。ので、私の話には驚くのも無理ありませんでした。しかし、数分後には期せるかな家族全員が「共にお行のつもりで留守に万全を期しますから、安心してお行に徹して下さい」と斯様に答えてくれました。

さて、そう言った以上は、道の子とし

て下座修業に入らせて頂くための万全の構えが必要ですので、常日頃おやかた様のおっしゃる通り、十分否十二分の気持で留守中の万事に配慮し、十二月二十五日に場に戻らせて頂いたでございます。すると、教務室からお呼出しがあります。すると、平井谷先生から「おやかた様のご指名によって、今度の下座長をやりなさい」と言われました。

予期せぬことだけに驚き且つ恐縮しまして、負荷の大任に感涙しつゝ、その大任をお受けした次第です。

敵たる中にも温かく

参加者は、北は青森から南は九州佐賀まで、また年令層も上は七十六才から二十五才まで、職業的にも千差万別で、まさに日本の一縮図が織り成されている様で、土地処の理を頂戴しつゝ、誠に有意義なお行に入らせて頂いたでございます。

場としても非常に大切な、この四十八年、しかも年頭の下座行を受けもたせて頂く光栄に、寒気何ものぞと全身の躍動

するのを覚えました。

五十六才という平均年令、しかも二十二名の大世帯でしたが、規律ある敵たるもの、中にも、温い和をもってお互同志励まし合い、一人の落伍者も、一件の事故もない様、二度と許されない三ヶ月のお行に悔を残さないように励みましよう——を合言葉に、全員元氣旺盛の裡に三月間を過ごさせて頂きました。

「信ずる誠に天が乗る」と申される通り、ひとえに、おやかた様の御加護の下、この有意義なお行をさせて頂きました。

男の中の男たらん

そして、最終日の三月三十日は、ご明断室で、全員ご面接を頂き、おやかた様から「一人の落伍者もなく皆喜んで良くやられました。結構でした」という慈愛溢れるお言葉を賜りまして、何かあつてものがこみあげてくるのを覚えました。

男泣きとはこういうものかと思わせて頂きました。涙は出ないけれど、腹で泣ける。このおやかた様の御思いに報ゆるには、私共は如何様にすればよいか。そ

の術はない。しかしおやかた様をしつかりと間違ひなく受け取らせて頂き、新しい道の要人として、恥しくない男の中の男となつて、おやかた様の手足となつてお使い立て頂ける様にならなければと、二十二名感激のうちに誓い合いながら、この尊いお行を了へさせて頂きました。それが為には、本当のお行はその後にあると思います。三ヶ月間は一応の基本を教えて頂いたに過ぎません。

幸い、先生方、諸先輩の恵まれた境遇にあることを感謝しつゝ、人さんを頂き、下座修業の成果を報恩の形において顕現させなければならぬことを信念しております。

話は前後いたしますが、お行の中途から、それまで非常に陰であつた方が、別人のように明るくなられたり、或はまた、人の前で話も出来なかつた方が、堂々としかも要点をしつかりまとめて立派に意志を表現するようになって喜ばれたり、こうしたことを見聞きして、わが事以上の喜びに浸ることが出来ましたのも、下座経験のこと、有難く思わせて頂いております。(完)

三ヶ月下座に参じて

浮世に灯ともす

これは筆者が三ヶ月下座に参じて、その期間中のある日、朝礼で話されたものである。



杉田 広善

十、十一、十二月と三ヶ月下座をさせて頂きましてあと数日となりました。この三ヶ月本当に有難い毎日で嬉しい／＼と語り合いながら、あつと言う間に過ぎてしまいました。

又昨夜は御仕込を頂きまして、何れ全国を行脚して廻るでしょうと言はれました。昭和四十三年頃のお言葉で「橋の下のレストランペンから泥棒に至るまでこれはと思つた人を追いかけてでも抱きかゝえて本来の人間にするのですよ、その時はいずれですよ」と仰言られましたが、不思議なことだと思っていました。

因らずも昨夜同じお言葉を頂きまして感無量なものがありますが、お話の中で

「大した人でもね、泥棒するっていうのは、もうよく／＼のことですからね、へそがこう開きおるでって言うんですよ。ですからそういう人には火をポツと灯すことができませんわね。火を灯すのにも両手をこう摺えてね、肩をこう摺えてそして教へるんですよ。そしたらポツと灯りますよ、そしたら、こりや本当に立ち直るんですよと申します。そうゆう事態が必ず来るんだということを皆さんよく覚えておいて下さいね」と続けられました。それはいかに苦しみが多い時代が今まさに来つつあるか、そしてその時代にはおやかた様から戴いた理法しかお助けするものが出来ないと言うこと。そして、それ

が結局は国助けと言うおやかた様の天業の荷を幾分でも背負うことになるのだと言うことを思い、あらためて大きな使命と因縁に身のひき締るものを覚えた訳でございます。

三ヶ月の下座の御行はいろ／＼ございまして、今思い出しますと楽しかったこと辛かったこと、吹き出すことなど様々ですが、その中で特に印象深く体験させて頂いたことは、朝七時半からの紫の間の清掃でございます。私は内側の欄間の周りをやらせて頂きましたが、実は一人で毎朝楽しんでゐる、又私にとつて大きな励みになりました。報告させていただきます。

小さい釘に教えられ

御承知のように清掃は毎日のことですから天井から床まで塵一つなくピカ／＼に磨かれて居ります。ところが、どうした訳か、向つて右側の上の框の裏面に一ヶ所釘が出て居るのです。二耗位の釘の先なんです、それが清掃の度に必ずひつかつて、タオルの糸がほつれたり、

切れたりするので。最初は どうしてこんなところにといいながら、もたオオルをひつかけておりましたが、或る日ハツと気がつきました。それはどんなにみたまをピカ／＼に磨いて戴いても、一ヶ所でも自分の外側にトゲがあつたら、それはひつかゝるんだ。そして目立つんだなと思ひ、之は自分の姿ではないのか、何となくしにくい自分の我を知らされてゐるのではないか、毎朝この紫の間で早く気がつけ／＼とお教へ頂いてゐるんだなと分ると、急に胸の中が熱くなつて参りました。その気持で居りますと、今度は紫の間の清掃の時間が待ち遠しく、ドキ／＼する位の喜びになつて参ります。あ、又今日も教へられた、あ、これが自分だ／＼と自分を叩きながら、ワク／＼しながらも厳肅な気持で紫の間に入らせ頂き、下座の日数が少くなるとなごりを惜しむ気持で一杯でございました。昨夜の松の間で「お前さん 我がチョッピリあるんですよ」と言はれ、なるほどやはりそうだったんだな、教へられていたんだなと深く受取らせて頂くと共に、新

しい道にいかにか教へがばらまかれてゐることか。日頃おやかた様が一切のことによつて悟り取るんですよとお示し頂いてゐることが、いかに大したことか一段と深く身に刻みつけることが出来ました。ともあれその釘さんともあと数日でお別れですが、非常にはりのあるお行で、十年目に近い私にとつて今迄にないうけとり方であつたと、自分を掘らして頂いた次第でございます。

人を頂けば情の情

此の度の下座に入りますときに、おやかた様から「もちより」と言うお言葉を戴いております。「どんな人でも自分より優れた立派なところがある。あ、この人のこんな素晴らしい面は今迄気がつかなかった。この人のこの味のある面は自分にはないな、そう云う風に頂くことによつて、自分がふくらむんですよ、ふくらむことによつて情の情になるんですよ。」とお教へ下さいました。私はまだ情がじわ／＼だと思ひます。それはやっぱり自我と云うものがあるんだと、まだ若輩のせ

いもあるでしょうが、やはり人の頂き方に徹してゐないものがあるのだと、今度の下座の指針とさせて頂きました。そして「下座によつてこの道が出来た」「国を思うなら、自分つゝつて下座しまししょう」のお言葉が本當に身にさゝり、自分をもう一遍ほり下げねば相すまないという気持で一杯でございます。

この三ヶ月の間に世の中の情勢は急転直下、非常な変化を来たしておると聞いております。浮世に帰れば私も驚かされること、思ひます。しかし、このことは何年も前からお聞かせ頂いております。今更あわてふためくことは何もございません。苑主先生からいづつも詳しく御指導頂いてゐることです。下座後はそれに負けないで、下座中に得た不動の信をもと、して、正々堂々と下座をしながら世の中に理をばらまかせて頂きたいと思つて居ります。

この三ヶ月物心両面何かとお援助頂きました。本當に有難うございました。深くお礼申し上げます。どうもありがとうございます。

(東京・日設(株)社長)

二月九日 大阪ロイヤルホテルで

「松木天村先生を囲む

定例茶話会」(第一回)

— 関西財界の諸名士集う —

桑嶋 正忠



「松木天村先生を囲む定例茶話会」は、去る二月九日(土)午後二時から大阪ロイヤルホテル新館四階三号会議室で催され、主として、関西財界の諸名士ら約三十名が出席して盛会だった。

この催しは、国替えをめぐるとする「新しい道」を世に知らすべく、まづ高山(指導層)の人々に打ち出そうと、神戸商工会議所会頭、砂野仁氏、松下電器産業株式会社副社長、東国徳氏、佐野安船渠株式会社社長、佐野川谷安太郎氏らの

ご尽力によって開かれたもので、今回はその第一回目。

まずはじめに、東国徳氏の挨拶があり、総いて松木天村先生のご講話に移りました。

天村先生は「今日は、一般の講演会のような不特定多数の皆さん方のお集まりではありませんので、少し、つつこんで詳しく「新しい道」についてお話させて頂こうと思います」と前置きされ、「天人松木草垣女史と新しい道」「新しい道

と人間本来性」国替えと新しい道」等について、一時間四十五分にわたって話され、出席者に深い感動を与えた様子でした。そのあと、佐藤三蔵氏の挨拶に続いて、閑院純仁氏が挨拶され、午後四時盛会裡に終わりました。

今回の出席者は、永田敬生氏(日立造船(株)社長、関西経営者協会会長、日本経営協会副会長)、和田昌博氏(関西電力(株)副社長)、中村竹夫氏(伊藤忠燃料(株)副社長)、古田敬三氏(大阪ロイヤルホテル副社長)、大津清氏(住友信託銀行常務取締役)、錦茂男氏(PHP所長)等々三十三名。

尚、この催しは、今年中の月例茶話会として、毎月九日、曜日に関係なく、大阪ロイヤルホテルで午後二時〜四時まで行われます。

また、東京においても、「松木天村先生を囲む定例茶話会」が、毎月十七日、ホテルオークラで午後二時から、また名古屋では、毎月二十八日、ホテル名古屋キャッスルで午後二時から開催されることになっております。

総調和の集い



日本会・日本総調和連盟と
総調和運動について

*

THE JAPAN ASSOCIATION
THE JAPAN FEDERATION
FOR UNIVERSAL HARMONY
AND MOVEMENT FOR
UNIVERSAL HARMONY

旧臘12月5日、東京ホテル・オークラで、佐藤栄作、福田赴夫、山岡荘八氏が世話人代表となって、総調和の集いが盛大に催された。

政界、財界の一流の人々及び学者、芸術家等、特に各国の大公使の面々で、実に国際的な集いであった。

日本会関西支部常任理事として、天村先生はこの日、道友佐藤三蔵氏同道で山席された。

この頁に載せた各種の写真は、当日会場で天村先生と握手を交された知名の方々である。



作曲家 黛 敏郎氏(左)と ↑



↑ 左から 佐藤栄作氏、福田赴夫氏
天村先生、佐藤三蔵氏



俳優
← 中村勘三郎氏(右)と



← 越智衆議院議員(左)と



← アメリカ大使館一等書記官(右)と

昭和48年

天村先生講演・卓話等一覽表

6	5	4	3	2	1	月
23 17 27 26	# 17 3 29 22	# 17 14 20	# 17 11 6 4 24	# 17 11 28 17		日
三和銀行福島支店 袋井市農事センター 浜松市民会館 住友銀行松原支店 台東区民会館 府中市民会館 小淵沢町役場 浪速信用上野芝支店 磐田商工会議所 蒲田駅ビル 美容容会館 尼崎労働福祉会館 協銀小阪支店 瀧野川信用金庫 川口信用金庫 大須賀町役場 三井信託支店 八日市浜野会館 四日市市民ホール 産業聯合会館 第一勧銀支店 掛川町農協 菊川町役場 同栄信用金庫	東大阪(府中) 東京(府中) 山梨(小淵沢) 大阪(堺) 東京(大田) 東京(渋谷) 兵庫 大阪(東) 東京(北) 東京(川口) 東京 東海 大阪(南) 滋賀 三重 東京(板橋) 東京(田無) 東海 東海 東京(港)	所在地				

新しい道主催 講演と映画の会

12	11	10	9	8	7	6	月
17 24 17 28 21 20	# 17 29 20	# 16 2 26	# 17 28 21	# 19	# 17 6 24		日
厚生年金会館 ケンポ会館 草加光信用金庫 和歌山商工会議所 南岡会館 伊東市松原温泉会館 勤労福祉会館 杉並公会堂 宝塚ホテル 鯖江市文化会館 区民センター 勤労福祉会館 小倉ステーションホテル 松下電器(電池事業本部) 老人福祉センター 両国公会堂 三和銀行玉出支店 小田原市商工センター 文京区民センター 中央卸売市場 木材健保組合 富士銀行支店 広青年教育センター 湊川神社	東京(新宿) 大阪(北) 埼玉 和歌山 大阪(阪南) 東海 東京(足立) 東京(杉並) 兵庫 北陸 東京(葛飾) 東京(中央) 北九州 大阪(東) 東京(荒川) 東京(墨田) 大阪(南) 湖南 東京(文京) 東京(中央) 東京(江東) 東京(世田ヶ谷) 中国 兵庫	所在地					

9	8	7	6	5	4	3	2	1	月
5 4 3 21 18 9	8 24 28 20 19	6 6 23 7	4 3 22 15	3 3 19	2 19	1 18			日
中津 豊後高田 下関 旭川大雪 登別 龍野 名古屋金城 横浜 宇都宮(合同L) 日光(合同L) 三田 堺登美丘 大坂アポロ 川治(合同L) 明石セントラル 横浜(合同L) 湯河原 長岡 東京芝 ライオンズクラブ	豊後高田 下関 旭川大雪 登別 龍野 名古屋金城 横浜 宇都宮(合同L) 日光(合同L) 三田 堺登美丘 大坂アポロ 川治(合同L) 明石セントラル 横浜(合同L) 湯河原 長岡 東京芝	所在地							

LC・RC・JC主催後援 卓話会・講演会

6 1	5 10	26	25	24	4 13	23	3 2	21	20	2 16	25	24	1月 23日	▼ロケット クラブ▲	19	16	11 15	14	"	4	9月 6日	
東 大 阪 中 R C	四 日 市 R C	熊 本 南 R C	鹿 兒 島 南 R C	宮 崎 R C	瑞 浪 R C	東 京 池 袋 R C	湯 河 原 R C	長 岡 東 R C	長 岡 R C	狹 山 R C	東 京 小 金 井 R C	東 京 国 立 R C	東 京 国 分 寺 R C		計 26 回	仙 台 (合 同 L C)	前 橋 (合 同 L C)	旭 川 (講 演 と 映 画)	吳 柳 川 L C	福 岡 舞 鶴 L C	佐 賀 (合 同 L C)	
					9 20	5 16	4 24	3 16	3月 2日	▼J C▲		12 14	10 5	9 21	9 20	8 22	13	12	11	7 10	6月 22日	
	合 計 57 回		計 6 回	福 井 J C	名 古 屋 J C	草 加 J C	鹿 兒 島 J C	東 大 阪 J C	小 田 原 J C	計 25 回		大 阪 淀 川 R C	福 岡 東 南 R C	伊 勢 R C	鯖 江 R C	福 井 R C	旭 川 北 R C	高 田 市 R C	妙 高 高 原 R C	新 井 R C	直 江 津 R C	西 神 戸 R C

12	11	10	9	8	7	6	5	3	1	月										
5	20	22	18	2	17	16	15	17	16	13	24	16	11	9	28	25	29	24	日	
日本会総調和の集	斉藤栄三郎氏と会談	近畿大学講演会	田中法相と会談	伊勢神宮遷宮祭	三木武夫副総理と会談	小林亀男氏夕食会	日本会関西支部	福田越夫氏と会談	焼津実業交友会	名古屋経営者協会	大阪好文クラブ	日本本会	朝明経済クラブ	北信会	奈良市桜井市有志	西宮健康法集会	山梨県人会	聖明園		名 称
ホテルオータニ	東京パシフィックホテル	近大講堂	東京・法務省大臣室	伊勢神宮内宮	東京千代田区官舎事務所	東京・成増商店街	大阪商工会議所	赤坂プリンスホテル	焼津ホテル	中経連ビル	第一生命ビル12F	大阪商工会議所	川越会館	北伊勢信用金庫	奈良市桜井老人ホーム	十三商工会館	東京パシフィックホテル	東京・聖明園		場 所
計 19 回																				

その他各種団体等における講演・会談等

編集後記

◆第二十五号をおとどけします。

春めきてものの果なる空の色
(蛇笏)

◆石油が世界中をゆさぶって冬が去ろうとしています。追儼の声は枯れても時の流れ、経綸のわだちはその歩調をゆるめる事はないでしょう。

「新しい道は本論に入る」と、一月、紫の間、松の間でおやかたさまの仰せです。

「この女をみこしに乗せるはずであった」と、この悔いを繰り返してはならない。

枯るるもの枯れ萌ゆるもの

萌えそめし(孝子)

◆「天の理」は四十八年十月十日の「本当の理」をいただきました。日本の女の本来の姿です。

日本の女のあり方を、昭和三十一年にお示しものを中心の特集

してみました。男のあり方も、おのづと浮き上って読める様ですが、道の方々ばかりでなく、広く世にお示しのはずです。一人でも多くの方にお読みいただきたいと思えます。

うしろから月のかげする

水をわたる(山頭火)

◆天村先生の御活躍もロータリー、ライオンズ、両クラブのゲストスピーチの実績の上に、いよいよ今年二月から東西大都市に定例

茶話会を持たれる事になりました。
○大阪ロイヤルホテル

新館四階三号会議室に於て
毎月九日十四時〜十六時

○東京・ホテルオークラ

本館十二階

スターライトラウンジ

毎月十七日十四時〜十六時

世の高山へ自ら出向かれて説かれようとする先生の下座行です。

芽ふかんとする ひしめきの

枝の空

(素逝)

◆今年一月六日の初場から、地元大阪が中心になり近畿地区道友が場の「守り(当番制)」につく事になりました。長い揺籠期を全国の方々に肩がわりしていただいていましたが、本来の姿への第一歩です。和のより大きく、より固く。

菊苗にみな添竹やにきはへり

(雨柳)

(編集子)

第 7 卷 第 25 号

昭和49年 3月 1日 印刷 頒 価 200円

昭和49年 3月 8日 発行 送 料 45円

矢 野 誠 一

小 野 佳 二

宗教法人 神光苑・新しい道センター

大阪府羽曳野市はびきの3丁目3番18号

〒 583 ☎ 0729 (56) 7971 (代)

東 洋 プ リ ン ト 株 式 会 社

堺 市 海 山 町 4 丁 1 6 6

☎ 0722 (33) 5785 (代)

あ さ

発 行 人 所
編 集 行 人 所
発 行 行 人 所

印 刷 所

お金のため方・ふやし方…

いままでどおりで いいのかな

はじめての方もお気軽にどうぞ…

みどりのコーナー

債券、投資信託、株式…証券には数多くの種類があります。あなたの目的、資金に合わせて、経験豊かな専門家が、ご質問やご相談にお応えいたします。お積立て、名義書換えなど、事務手続きも〈みどりのコーナー〉へお申しつけください。



山一証券

東京都中央区日本橋兜町1の3(〒103)
電話・東京(668)1111(大代表)

